
Seasons

緯月葩鶴士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seasons

【Nコード】

N6137K

【作者名】

緯月葩鶴士

【あらすじ】

ある時、とある二人は想った。

—この世界は本当に、“平和”なのだろうか。

そして、二人は志す。

—そうか、本当の“幸せ”を探し出せばいいんだ。

—そうだ、偽物の“幸せ”を盗んでしまおう。

こうして、本当の“平和”を目指し、一人は“探偵”に、もう一人は“怪盗”になる事を決意した。

手段は違えど、目的は同じ。

これは、そんな同じ志を持つ二人が交差して、彼等の“日常”が壊れていく物語。

プロローグ（前書き）

ゆるーくゆるーくのんびりと更新していく予定です。
気を長くしてお楽しみください。

プロローグ

世の中、ちょっとした事で、ほんの些細な事で、あっという間に状況が反転する、という事が多々ある。

それは戦争とか不景気とか政権とか——時代によるもの——だったり、ストレスとかリストラとか失恋とか——対人関係によるもの——だったり、地震とか台風とか火山の噴火とか——自然災害によるもの——だったり、そもそも、生まれてきたその瞬間に、絶望のどん底まで叩き落とされてしまう事だってあるのだ。

そういう点でいえば、今、このご時世に、“日本”という小さな島国の中流家庭に生まれ育った彼等は、比較的

“幸せ”だったのだと思う。

というか、それ以外の何物でもなかったと思う。
にも拘らず、そんな平凡な、ありふれたような“平和”な日々を送っていた一人の少年はある日、こんな事を想った。

——これは本当に“平和”なのだろうか。

と。一方、時を同じくして、こちらに関しては私の口からは何とも言えない。少なくとも、“平凡”とは言い難い暮らしを送っていたあるもう一人も、

——この世界は本当に、“平和”なのだろうか。

同じような事に想いを馳せていた。

それはまるで、

前者は永遠のように続く同じリズムの毎日に飽きたかのように。

後者は自分の今居る世界にみきりをつけたように。

そんな物は幸せでも平和でもない、ただの“退屈”だ。と言わん

ばかりに。

まだ四半世紀も生きていないような子供が、だ。
いや、ただの子供だからこそ、そんな事を考えつき、更にはその先、行動にまで移す事が出来たのだと思う。

そう、彼等は結論に辿り着いたのだ。

——そうか、本当の“幸せ”を探し出せばいいんだ。

——そうだ、偽物の“幸せ”を盗んでしまおう。

と。この時はまだ、お互いの存在も知らず、一人は平凡に、一人はやや異端ではあったが、彼等の日常にぬくぬくと浸っていた。

こうして、本当の“平和”を目指し、一人は“探偵”に、もう一人は“怪盗”になる事を決意した。
手段は違えど、目的は同じ。

これは、そんな同じ志を持つ二人が交差して、彼等の“日常”が壊れていく物語。

プロローグ（後書き）

仰々しく書いてはみたものの、実際、これはとある二人に巻き起こったささやかな事件を題材に進めていく予定です。まだ半分ぐらいしか頭の中にさえ出来ていませんが、頑張って書いてみます。とりあえず。可愛がつてやってください。

八仙花（前書き）

第一幕：過去

八仙花

彼女と出逢ったのは、僕が中学生一年生の、ある雨の日。

あの日——僕はいつものように、神社の境内を突っ切っていた。塾から家に帰る時の近道なのである。時間も遅いし疲れているし雨はうざいしで、僕はすごく、憂鬱な気分だった。

——せめて、雨だけでも止まないかなあ……。

僕は雨が大嫌いだった。濡れるし、じめじめするし、気分まで暗くなる。

にも拘らず、僕はあの時、傘を忘れてしまっていた。だから余計に、絶え間なく降り注ぐ水滴がうざったくなつて、しとしとしたたかに雫を落とす鼠色した憎い奴を睨みつけてやろうと——いや、流石にそれで雨が止むとは思わなかったが——何となく文句でも言つてやりたい気持ちになつて、顔を上げた時、

僕の瞳の中に、何やら赤いものが映り込む。

雨で霞んで雲で曇つて日が暮れて暗い景色の中に、突然、原色が現れたので、僕は驚いて思わず足を止めてしまった。

ジャリ

その音で、彼女の方もこちらに気が付いたらしい。今までこの神社の精花の前に佇んで、ぼーっとそちらを眺めていたようなのだが、すーっとこちらへ顔を向けた。

——美しい。

その人は、今まで気が付かなかったのが可笑しいぐらいに、綺麗な人だった。長い黒髪を後ろでまとめ、赤い着物を着た、まるで日本人形のような上品な美しさ。

精花の白と空の灰色、それが彼女の美しさを一層際立てていて、そう、まるでそれは一枚の絵画のようだった。

僕は不覚にも、しばらく見惚れてしまい、声を出すのも、目線をそらすのも忘れて、彼女を見つめ続けてしまう。

が、はつと気が付いた時、ばつちりと目が合ってしまった。のを誤魔化す為に、

「あの、寒くないんですか？」

と若干場違いな質問をしてしまった僕を、責めないでやってほしい。そして、それにも関わらず、

「ええ、大丈夫ですよ。私、雨が大好きだから」

満面の笑顔で返してくれた彼女は、僕より随分と大人だったと思う。答えが返ってきた事に対して、ほっとしたのは紛れもない事実だった。

「へ、へえ。そうなんですか……」

にしても……雨が好きだとは。世の中には変わった人もいるものだななどと思っていると、彼女は僕の心を見透かしたように、悪戯っぽい笑みを浮かべて言う。

「ふふ。私、変わってるでしょ？」

僕は驚き、

「そ、そんな事、ないですよ！」

そう言うのが精一杯だった。動揺丸出しの台詞である。

——あ……。やっちゃった……。

折角こんな子供に親切に答えてくれた人に対して、何たる無礼だ、とか思っただけなんだ。話しベタにも、人見知りにも程がある……。

だが、彼女の方は全く気にしていなかったようで、

「じゃあ、また二日後に」

という言葉が聞こえた。

「え？」

気が付くと、もうそこに彼女の姿はなかった。

それにしても、何故僕がここを通る日を、彼女は知っていたのだろうか？

時刻は八時十三分。仮にここ近くに住んでいる人でも、この薄暗い境内の中を動く物がそうはつきりと見えるとは思えない。では、

何故……。

二日間丸丸考えて、僕はやっと答えらしきものに辿り着いた。何で僕はこんな簡単な事に気が付かなかったのだろう……。しかし、何かこう引っかかる物がある事もまた、事実ではあった。

が、これ以上考えても埒が明かないので、僕は彼女に直接聞いてみる事にした。

「ええ、そうですよ」

やはり僕の思った通り、彼女はこの神社の関係者の人だった。きっと、神主さんかなんかの娘さんで、大方見周りの時にでも僕の事を見かけていたのだろう。そう思って、僕はあえてそれ以上の追及をしなかった。解りきった事を聞いても、彼女に失礼にあたると思っただからだ。

「そういえば、まだ名前を言っていないませんでしたね」

一通りの事情を話し終えた後、彼女はふと思い出したように切り出した。

「私、ウヅキミナっていうの。貴方は？」

普段なら絶対に“知らない人には名前を教えない主義”の僕ではあったが、彼女が自分から名乗った事と、何となく悪い人にも見えなかった事とで、僕も正直に名乗る。

「えっと、サンドウ、サンドウジュンです。ウヅキさん」

「ミナで良いわ、ジュン君。そうそう、さっきはよく解りましたね」
最初は彼女が何を言っているのかが解らなかったが、“さっき”話したと言ったら僕が彼女の正体を見抜いた事ぐらいだったので、あのぐらいは普通に分かる物じゃないかなー？と思いつつも、褒められた事は普通に嬉しかったので、若干照れながら僕も言葉を返した。

「ああ、あれは、その……日頃から考える癖をつけていて。あの、僕、探偵になるのが夢なんです。だから……」

そこまで言って、僕は自分の頬が火照っていくのを感じた。

——しまった……。何でそんな事まで……。

僕は自分の夢を今まで誰にも話した事はなかった。だって、そんな事言っても反対されるか、馬鹿にされるだけだと思っていたから、それなのに、どうして……。

彼女も少し、驚いたようで、

「そっかあ。探偵かあ」

などと、うんうんとわざとらしく頷いていた。

——やっぱり、理解しろって言う方が無理だよな。

そう思い、フォローの言葉を入れようとしたら、

「では、未来の探偵さんに問題です」

と、さつきとは打って変わって明るい口調で彼女は言葉を続けてくれた。僕にはそれが、一番良い、僕が望んでいた対応のように思えた。

——この人は、何か他の人達とは違うかもしれない。

それは僕の心を開くのに充分だった。

「はい、何でしょう？」

僕も笑顔で、彼女に答える。

「私の、ウヅキミナという名前は漢字ではどう書くでしょうか？」

「えー！ うーん……ヒントは？」

「そうねえ……。今の“季節”かしら？ ちなみに、君は“参”る

に“道”に“潤”う、ね？ そうでしょ？ 参道潤君」

「！？」

——当たってる。確かに、僕の名前は参道潤だ。でも何で？ ……

ん？ まてよ、あ！

「ミナさん、僕の鞆、見たでしょ？」

僕の鞆のど真ん中。学校の指定のものなので仕方なく、それにしてはでかかかと“参道潤”と書いてある。

「あ、ばれちゃった？ でも、私の名前は教えないわよ？ 次に会う時までを考えておいてね」

「えーっ！」

文句の一つでも言ってやろうと思ったのに、その時にはもう、彼女は去った後だった。

暗闇に雨音だけが、静かに響いていた。

それからというもの、僕は彼女に会う度に彼女の名前を当てようとしたのだが、いくら考えても全く分からなかった。どうやら、一般的に使われている漢字ではないらしい。

そればかりか、僕が今まで秘密にしてきた事のほとんど——学校の事、家族の事、友達のこと——を、彼女に話してしまった。僕が何を話しても、彼女は笑顔で聞いてくれる。僕の下手なまとまりのない話に、彼女は誠実に耳を傾け続けてくれた。

彼女と話していると、不思議と気分が和らぐ。

僕はそんな彼女に、だんだん惹かれていった。

しかし、その反面——彼女と居れば居るほど、疑問に感じる事も出てきた。

一つ目は彼女がいつも赤い着物を着ている事だ。“着物を着る”という行為自体は、それほど可笑しい事ではないし、それは実際彼女によく似合っているのだ、そこはまあよいのだろう。だが、それにしても若い女性が着物ばかり着る物なのだろうか？ しかも、柄は違えど赤色だけ……。

それにもう一つ。僕は彼女に出逢ってからというもの、全く濡れないのだ。思えば、彼女に初めて会った時も、僕は傘を持っていなかった。それなのに、家に帰ると、服や靴、さらには鞆に至るまで、何一つ濡れてはいない。小降りとはいえ、一晩中降っていたのだ。少しぐらい濡れていてもおかしくない、いや、濡れていなければおかしいのに、まるで僕の周りだけ見えないバリアーでも張られているかのように、水滴の落ちた形跡すら無い。まあ、おかげで僕は、この鬱陶しい雨の中を快適に過ごす事が出来たのだが。

いつもは長く感じるはずの二週間は、彼女と話すという楽しみも

相まって、あっという間に過ぎていった。

塾も終わり、僕はいつものように彼女の居る神社に向かった。

すると、普段なら必ずいるはずの彼女の姿がない。何か嫌か予感がして、僕は少し辺りを搜索してみた。賽銭箱の近くに手紙が置いてあるのを見つけ、僕はすぐに封を開く。

「潤君へ。いつも塾帰りに寄ってくれて、ありがとう。とっても楽しかったわ。でも、それももう終わり。私は戻らなければいけません。明日の朝、ここで待ってます。少し遠周りになってしまっけど、学校に行く途中で、出来れば寄って行って下さい。ミナ」

——何故、今頃急に……？ 変わった事なんて、何一つ……。まさか！ まさか……な。

僕はある一つの結論に辿り着いた。だがそれは、到底信じられるようなものではない。でもそう考えてしまえば、今までの事が全て納得できる、というか腑に落ちる気がした。

とにかく、明日の朝、またここに来てみよう。

例え、どんな結末になろうとも。

その日の夜、僕はなかなか寝付けなかった。

次の日、僕は朝早くに家を出た。彼女にいや、ミナに会う為に。

僕は深く息を吸うと走り出した。居ても立ってもいられない。一刻も早くミナに会いたかった。

境内のいつもの場所に、ミナは立っていた。

「ミナさん……」

息を切らしながら境内に入ってきた僕を見て、彼女は少し驚いたようだった。が、すぐに、少し悲しそうな顔で言葉を紡ぐ。それは、いつも笑顔の彼女からは想像もしえないような、淋しそうな顔だっ

た。

僕は自分の予想が当たってしまった事を悟った。

「潤君……。ごめんなさいね。でも、私、戻らなきゃ、この子の為に」

ミナの視線の先には、この神社の精花があつた。そういえば、彼女は初めて会ったあの時も、ここに居たんだっけか……。

「やっぱり、ミナさん。貴女は……。だとすると、貴女、いや、君の名前は……」

「ふふ。解ったみたいね。それじゃあ、もう、行くね。……ありがとう。楽しかった」

水無が微笑んだその瞬間、雨が一層強く吹き付ける。そして、長く降り続いた雨は上がり、そこには澄んだ青い空と、日の光に照らされた赤い紫陽花があつた。

僕はしばらく、その場所から動く事が出来なかった。

*

あれから、少し日が経った。季節は夏に向かっていて、神社の精花であり、いつの間にか赤く色づいた紫陽花も、もうしおれかけている。その前に——彼女の居た所に——立って、僕はポツンと呟いた。

「ありがとう。また会おうね」

水たまりが太陽の光に反射して、僕にはまぶし過ぎるほどにきらきらと輝いていた。

——うん。僕はもう、大丈夫だよ、水無。

君と過ごした事を忘れる事なんて出来ないし、実際、まだ僕は塾帰りはおろか学校の帰りにもここを訪れている訳だけれども、でも、大丈夫。だから、見ててね。

『頑張つてね、潤君』

そんな声が、聞こえた気がした。

僕にとって、彼女は、限りなく温かい太陽のような人だった。

僕は一生、この梅雨の合間の出来事を忘れる事は出来ないだろう。

僕に勇気をくれた、大切な僕の友人。 雨月水無。

君の事は、僕がちゃんと覚えてる。だから、来年も、また綺麗に咲いておくれ。

僕も、頑張るからさ。

六月。それは、僕の一番好きな季節。

八仙花（後書き）

実はこの話だけ、ちょっと作風が違います。
が、あんまり気にしないで下さい。

探偵サイド、参道潤の過去でした。

空桜

あれは、僕が小学校四年生の頃だった、と思う。

その当時、僕の両親は僕の将来を巡って、確か、具体的には僕を公立中学に入れるか、私立受験をさせるかという事だった——ただか
だかその程度の事で、とも思ってたものだったが——兎に角、その頃
両親は対立していた。本人達は気取られないようにしていたのだろ
うが、時折夜中に響くヒステリックな悲鳴、何かが割れるような物
音、低く唸る怒号などから、幼心にも感じる物はある。

そんな訳で、直接的表面的には顔にも口にも出さなかったものの、
かえって、それを気にし過ぎてしまったのか、その時僕は疲れてい
た。心なしか、溜息も多かった気がする。

子供心に、“離婚したらどっちについていこうかな”とか、結構
真面目に考えていた。

あれはそんな憂鬱な日々が数週間続き、両親の仲も目に見えて悪
くなり、家庭内は常に不協和音が鳴り響き、ピリピリとした緊張感
に包まれ、今にも崩れそうな空気に僕自身が押しつぶされてしま
いそうな、そんな時だった。

放課後、いつものように教科書をランドセルに詰めこみ、帰り支
度をしていると、不意に

「よ、秋則」
あきのり

と、後ろから声を掛けられた。僕は振り返って、声の主に返事をす
る。

「ああ、虎季」
たけゆき

「どうした？ 最近元気ないけど……何かあったのか？」

こいつは変な所に鋭いなー、と思いつつこんなプライベート極ま
りない事で友人を悩ますのもどうかと思い、というか僕のプライド
的に言う事は躊躇われたので、

「何でもないよ」

そう、ぶつきらばうに答える。すると、それが逆に虎季レーダーに引っ掛かったのだろうか、

「何でもない訳ないだろ」

と更に食いついてきた。

「兎に角、話してみろよ。一人で抱え込んでても、何の解決にもならないだろ？」

な？ と心配顔で言う虎季に促されて、僕はとうとう話す気になった。

「誰にも言うなよ？」

一応念を押して、僕は虎季を公園に連れ出す。流石に、学校で話すのは気が引けたからである。

西日の差す公園で、二人並んでブランコに座った所で、僕は虎季に全てを打ち明ける。

虎季は、僕の言う事一つ一つを真剣にうんうんと相槌打ちながら聞いてくれた。

それまで、虎季は割と皆の輪の中心に居て、お調子者というイメージがあつたから、その真摯な対応は僕の目に新鮮に、そして意外に映る。

順序立てて話す事に慣れていなかったのと、自分の、それも家族崩壊の危機に関する事だったので、大分主観が入り感情的になつてしまい、全てを話し終えた時にはもう日は暮れ、空は茜色に染まっていた。話を終え、しばしの沈黙の後、

「そっかあ。大変だったんだね」

しみじみと虎季が言った。

「うん」

今日はこれで終わりだと思った。実際、虎季はよつと言ってブランコから下りたし、僕の心も穏やかとは言えないものの、大分落ち着いてはきていたし。

——ありがとう。

そう言って別れようと口を開きかけた時、それよりも先に虎季の口から出た言葉は、思いもよらぬものだった。

「で、どうするの？」

「どうするって……」

「だって、このままじゃダメだろ？」

「そうだけど……」

「俺が力になるからさ。何とかして、親父さんとおふくろさんの仲、取り戻そうぜ」

にかつと笑った虎季の顔が夕陽と重なって、何ともまぶしくって、頼もしくって、つい、俺はこう言った。

「……うん」

まあ、小学生が夕方過ぎに二人で公園にたむろしているというのもアレなので、僕は虎季を家に招いた。良いのか？ と最初はビビっていた虎季も、良いんだと俺が言つと、そうかと納得してくれた。僕の両親が共働きで、常に夜が遅い事を覚えていたのだろう。彼は僕の家に着くまで、それきり一言も発しなかった。それがなかなかえって、僕には心地よかった。

そんな訳で。

僕達は僕の家のリビングに居た。というか、僕が簡単に掃除・洗濯・皿洗いなどを済ませている間に、虎季にはソファで考えをまとめてもらっていると見せかけてくつろいでもらっていたのだった。多分、こんな時間まで引き留めてしまった負い目もあったのだと思う。一通り家事を終えて、後は水やりだけだ、と思いジョウロに水を入れてベランダに近づくと

「手伝うよ」

率先して、虎季は窓を開けてくれた。

「ありがとう」

と言ってはみたものの、苦笑。

——ここはあんまり見られなくなかったんだよなあ。

そういう意味だったんだけど、やっぱり伝わらなかったみたいで、
「？」

虎季は小首をかしげた。まあ、いいか。今に分かるさ。

「！？」

ベランダに出た瞬間、虎季は目を見張った。……まあ、そうだろうな。

実は元々、僕の両親は息子の僕が言う位、全くとって良いほど、趣味や好みが合わない。父が犬派なら母は猫派。母が暖色好きなら、父は寒色。父が洋風なら、母は和風。といった具合に。

という訳で。唯一の共通の趣味、ガーデニングも、その趣向は違うのだった。

左：父ゾーン。イングリッシュガーデン。例）ハーブ（ローズマリー・ミント・バジル・チャイブ・レモングラス・パセリ・カモミール etc）、マリーゴールド、マーガレット等。

右：母ゾーン。日本庭園。例）紅葉、桜、銀杏、苔むした岩、池。そしてそれらは、一面の芝生で繋がっている。そりゃ、吃驚するよねー。

「……よく、今まで離婚しなかったね」

あ、ごめん。と虎季は思わず口から洩れた失言を取り繕ったが、僕もその通りだと思った。でも……未だに、何故その話をしようかと思ったのかは解らないけれど、その時、僕は彼に昔話をした。僕がまだ幼稚園生の頃、まだ、僕達家族の仲が良かった頃の話である。父も母も、あの頃はそこまで自己主張が強くなく、お互いを尊重し、認め合っていた。庭も、今みたいに分断されてはいない。背の高い木は母の好きな和風の樹、草花は父の好きな洋風の花々が咲き乱れ、和洋折衷、明るくて美しい庭だった。中でも、今の季節は二人とも好きな花があつて……と、半ば言い訳のように話していたら、
「それだ！」

虎季はいきなり大きな声を出して、立ち上がった。驚いた僕は、目

をパチパチさせながら、彼に尋ねる。

「何が？」

「僕が秋則のご両親の仲を取り持つてあげるよ」

そう言つて、彼はいくつかの質問と、いくつかの注文を僕にしていた。そして、帰り際、虎季はウイंकをしながら言う。

「楽しみにしておいてね。僕が君達家族に魔法をかけてあげるから」

虎季が僕に聞いた事は、次に両親がそろっていられるのはいつかという事と、二人は毎日庭を見る習慣はあるかという事だった。僕はそれに、二人は毎週日曜日はそろって休みを取り、三人で買い物をし、ご飯と一緒に食べる、そして庭は毎朝出かける前に見ているはずだ、というように答える。すると、彼は納得して、

「それなら問題無い、上手くいく」

と言い、一つだけ、僕に頼み事をした。それはその買い物時間を出来るだけ引き延ばすという事である。僕は承知して、いかに時間を延ばすかの策を練った。

そして、日曜日になった。僕達家族はいつものようにうわべだけの仲良し家族、三人そろつてのお買い物に出かける。予定通り、僕は出来るだけ買い物時間を延ばし（具体的にはおもちゃをねだつてみたり、洋服を買つてもらつたり、昼食を外で食べさせてもらつたりして）夕方頃に家に帰った。

そして――

「どうしたの、これ!？」

帰るなり庭を見に行った両親は驚きの声を上げていた。その声につられて、遅れて僕も庭を見る。確かに……衝撃だった。

今日の朝まではイングリッシュガーデンと日本庭園がセパレートされた異色の庭だった。それが、今では仕切りは外され、土台となつている芝生はそのままだったものの、その上から覆い隠さんとは

かりの白・薄桃・濃桃の花が大量に咲き乱れている。

ちなみに。これは後から気が付いたのだったが、上から見ると濃桃の花でリボンがかけられているように見える。つまり、プレゼントだったのだ。誰への？ それは、決まっている。僕達家族への、だ。では、誰からの？ それは――

「お気に召しましたか？」

横からひよこつと、何気なく出てきたのは、やはり虎季だった。

「！ 誰だ、貴様は。どこから入ってきた！？」

父はその姿を認めるなり、怒鳴った。自分のお気に入り庭が勝手にいじられ、見知らぬ少年が勝手に敷地内に入っていたのである。まあ、当然っちゃ、当然だ。

一方、母は虎季を覚えていたらしく、

「えーっと。虎季君、よね？ 秋則のお友達の」

と、警戒しつつも丁寧な口調で尋ねる。

「はい。お久しぶりです、おばさん」

「そうなのか？ 秋則」

「はい、そうです」

うむ。と低く唸って、一応父の怒りは落ち着いたようだった。しかし、

「何故君がここに？」

いぶかしむ気持ちは変わっていなかったらしい。

「お二人に、僕と秋則からの、ささやかなプレゼントですよ」

虎季はそんな父の視線をもろともせず、笑顔で答える。

『プレゼント？』

首をかしげる両親。が、虎季はさらに笑顔で畳み掛ける。

「はい。お二人はこの花がお好きだったとお聞きしまして。何でも秋則の名前もそこからつけた、とか。それなのに、最近ではお二人の仲があまりよろしくなくなってしまい、この花も、忌まれるようになってしまったそうですね。部外者の僕が立ち入った事を言うのもなんですが、秋則は随分悩んでいたようですよ？それこそ、僕に

も解るぐらいには、ね。どんなに隠そうとしたって、子供は親の事は分かってしまうものです。そんな秋則の気持ちは、お二人とも、解っていただけますよね？しかし、この事だけは勘違いしないで下さい。これは僕が秋則に元気になってほしくてやった事で、秋則は何もしていません。勝手に庭に入り、いじった事は謝ります。どうもすみませんでした。でも、考えてみて下さい。“貴方達にとって、本当に大切なモノは何なのか”。お時間とらせてすみませんでした。では、失礼します。秋則、またね」

そう、一気に言いたい事だけ言って、ひょいっと塀の上を跳び越えて去っていった。突然の事だったので、僕はあつけにとられ、虎季が消えたようにも思えた。

後には感慨深げに突っ立っている両親と、まだ呆然としている僕と、夕陽に照らされて輝く、花々が残された。

その後、両親は仲直りをしたらしく、僕の家にも温かな時間が流れてきた。

それもこれも、虎季のおかげだ。

あの時、彼はきつと一人で黙々と僕達家族の為に、僕の為に、花を植えていたのだらう。その証拠に、ちらつと見えた虎季の手は泥だらけになっていた。

さて、皆さん。こんなに良い奴が、泥棒になったりすると思いますか？ 他にも虎季に助けられた人を僕は何人も知っている。きつと、彼の事だから理由があつて――

パタム。

そこまで読んで、俺は新聞を閉じた。昨今話題の怪盗についての特集記事だそうなので、何か情報が得られればと読んでいたのだが……。あまりにも美談過ぎて虫唾が走る。悪寒がする。途中で勢い

余つて閉じてしまった。一体どこの誰かは知らないが、よくもまあ
こんだけ書けたものだ。……まあ、思い出は美化されるものだから
な、と自分で自分を納得させ、高ぶった気持ちを落ち着かせる。内
容はクダナイものだったが、それでも、収穫はあった。

「さあ、決着をつけようぜ。虎季」

空桜（後書き）

まあ、皆さんお分かりとは思いますが、最後に出てきたのはあの新米探偵です…。

木蓮花

五月某日。俺はいつもの新聞配達のバイトを休んで、ある寺を訪れた。

時刻は朝の五時ジャスト。普段なら誰もいないはず。だが……。

「おはようございます、リュウさん」

階段を上り、しんとした墓地の中を散策していると、整った顔立ちの黒髪の少年に声を掛けられた。やはり、彼の方が早かったようである。

「はよ、潤」

それで、それだけで、会話は終わった。何故なら、話す必要が無いからである。

俺達は人を“視る”事が宿命なのだから。

俺は神城龍貴^{かみしろ たつき}。訳あって、三件のバイトを掛け持ちしている。そんな俺が今日墓地に来たのは、従妹の塚田花音^{つかだ かのん}の月命日だったからだ。花音と潤は幼稚園に入る前からの幼馴染。だから、俺も潤もやつて来たのだ。

神という奴は理不尽だ。

どうして、俺より先に花音があのに逝ってしまったんだ。どうして……。

全ては一カ月前、ある中学校で起こった悲しい事件から始まる。

*

四月某日。俺はいつものように新聞配達のバイトを済ませると、その足で次のバイト先であるコンビニへ向かった。その日は良い天気、青いお空と白い雲を眺めながら、ついのはびりと歩いてしま

った。……案の定、バイトに遅刻。店長にめちやくちや怒られた。そんな訳で。俺はいつもの倍のペースで在庫整理をやらされていた。たった三分遅れただけなのになあ、と溜息をつきかけた時――

「龍貴――！」

店長が叫びながらこちらへやって来た。また説教かよ……。と思い、立ち上がり、店長の顔をよく見ると、様子がおかしい事に気付く。店長の顔は、真っ青だった。

「ど、どうしたんですか、店長」

俺はおそろおそろ聞いてみた。何故だかとてもなく、嫌な予感がしたからである。そうしたら、店長は最初は唇を震わせるだけだったが、徐々にそれが文字を形作り、

「か、花音ちゃんが、花音ちゃんが……」

と言った。それだけで、俺を動かすには充分である。俺は店長の言葉を最後まで聞かずに、店を飛び出した。花音の居る中学校は、店から目と鼻の先。程なくして、俺は中学校へ到着した。すると、何やら人だかりが出来ている。

「すみません、ちょっと通して……」

人をかき分け、ようやく辿り着いたその先に、ロープを首に軋ませながら揺れている花音がいた。木にロープをかけて、首を吊っている。いつもは少し赤みが差している頬は青白く、全身の力は抜け、誰が見ても明白にもう命が無い事が解った。

「花音……」

隣で声がした。潤だった。こちらも全身蒼白で、カタカタと小刻みに震えている。

「潤、大丈夫か……？」

「りゅ、リュウさん、花音が……」

そう言い終るや否や、潤はその場に倒れた。

「潤、潤！」

俺はその場を離れ、とりあえず潤をバイト先で休ませる事にした。

一時間後。潤が起きたので、少し話を聞いてみる事にした。

「何が、あったんだ？」

「僕にもよくは解りません……。朝来たら人だかりが出来て……。それで……」

悔しそうに、悲しそうに唇をかみしめる潤。目には涙があふれている。これ以上聞いても、傷を広げるだけか……。

「そうか……。分かった。俺はこれから、ちょっと調べてみるが……」

……。お前は

「僕も」

俺の言葉をさえぎり、目を腕でこすりながら、潤は言う。

「僕も行きます。手伝わせて下さい」

その瞳にはまだ憂いが残っていた。が、その真剣さとまっすぐさは、痛いほど伝わってくる。

そうか、そうだな。潤だって、俺と同じ気持ちなんだもん。それに、いつまでもうじうじしているのは、彼にとっても良くないだろう。よし。

「そうだな。じゃあ、とりあえず、お前は学校に戻って生徒から事情を聞いてみてくれ」

「わかりました。どうせ、今日は授業はないでしょうから、聞く時間は沢山あると思います。終わったら……事務所に行きましょうか？」

「……悪いな。俺もなるべく、早く戻るから」

「わかりました。では、後ほど」

潤を学校に送り届けた後、俺は行動を開始した。

コンビニの店長、店員、商店街のおばちゃん、野次馬のおっさん……。いろんな人に話を聞いて回る。が、結局得られた情報は、

“塚田花音という少女は決して自殺をするような子ではない”

という、解りきったものだけだった。

確かに、現場の状況的には花音の死は自殺と断定されてもおかし
くはないだろう。

実際、ロープの袋や踏み台までそこには残されていた。

だが、彼女を知っている人間ならば、誰も彼女が自殺したとは思
わないはずだ。

何故なら彼女は、困難には真正面から立ち向かい、逆境なんてな
んのその、スポーツ万能、成績優秀、サッカー部のマネージャーの
かたわら、学級委員まで見事に勤めあげるといふ俺としても鼻高々
な、人間として完璧な女子中学生だったからである。

いや、これだけでは、“そういう人だからこそ、悩んでる事もあ
ったんじゃないの？”と思う人もいるかもしれない。だが、花音は
そういう人間では決してない。付き合えば付き合うほど、一緒に居
る時間が長いほど、それは解ってくる。

だから、俺達は調べているのだ。

花音を自殺に見せかけて殺害した犯人を、この手で捕まえる為に
……。

大した収穫はなかったが、あんまり潤を待たせても悪いと思つた
のと、朝から何も食べていなかったのでとりあえず、俺も事務所に
向かう事にした。

事務所はコンビニから徒歩二十分ぐらい。俺の住むアパートの一
室にある。というか、ここの大家でもあり、事務所所長でもある成
田真帆さんのご厚意により、格安で住まわせてもらっている、と言
った方が正確かもしれない。

さて、その事務所とは、何を隠そう、探偵事務所の事である。従
つて、俺も探偵のはしくれという事になる訳だが……。まあ、そこ
は置いておこう。慣れた足取りで階段を上り、チャイムも押さずノ
ックもせずにドアを開ける。ガチャ。

「こんにちはー」

「おかえりなさい。……潤君、待つてるわよー。あ、今何か作るわね」

出迎えてくれたのは、真帆さん。彼女はこちらが何も言わなくても、見ただけでその人の置かれた状況などが解ってしまうという、いわゆる安楽椅子探偵である。

「いつもすみません。真帆さん」

彼女に礼を言ってから奥に入ると、そこでは潤がふくれっ面をしながら待つていた。

「リュウさん遅ーい。僕、一時間も待つてたんだよ？」

朝のあの表情とは打って変わって、比較的明るい、落ち着いた表情をしていた。

これは……彼にとって、果たしてどうなのだろう……？ 心配にはなつたが、今はその事を考えている余裕はないので、俺はそれを頭の隅に追いやった。

「悪い悪い。悪いついでに、ごめん。俺あんまり収穫ないんだ……」

「そうですか……。でも、それは仕方ないですよ。学校側がかなり口止めをしたみたいですし。記者会見も、原因がはつきりするまではやらないとか」

「そうか。じゃあ、結局解らずじまいか……？」

「たっちゃん、潤君をなめちゃあ、いけませんよ？」

どん、と。真帆さんが山盛りのナポリタンと珈琲を持ってきてくれた。ありがたい……。が。

「？ 真帆さん、それって……？」

「潤君、何か掴んできたみたいですよ？」

「そうなのか？ 潤」

「え？ ええ、まあ……。関係はないかもしれませんが」

歯切れの悪い潤。だが、あの、真帆さんが言っただ。何かあるはず。

成田真帆。年こそ俺の五つ上、二十六とまだ若いが、安楽椅子探偵としてこの業界では知らぬ者のいない、有名人だ。この事務所も、

彼女が二十歳になった時に、彼女の父であり俺の尊敬する探偵でもある成田賢吾さんが任せたものである。その彼女が言うのだ。

「それでもいい。話してくれ」

兎に角、手掛かりが欲しい。

その気持ちは潤にも伝わったらしい。ぽつりぽつりと話し始めてくれた。

「はい。では……。あくまでも噂なんですけど……。うちの学校って、進学校だし、部活動も盛んですから勉強とかについていけなくて、それを苦に自殺する人が案外居るんですよ。それで、花音もその口だと思われてたみたいなんですけど……。それとは別に、最近誰かが自殺すると、学校で飼っている動物が何かしら一緒に死んでいるみたいなんです。それで、今回も鶏が野犬に食い殺されたみたいで……」

「成程……。それがどれくらい続いているのかは解らないが。確かに、偶然とするには出来過ぎている気がするな。よし、調べてみるか」

「は、はい!」

意気揚々、事務所を後にしようとした時、

「たつちゃん。ちよつと来てー」

奥に行つたはずの真帆さんに呼び止められた。

「?」

「今回だけ、特別よ?」

……。さっきから何かカタカタ音がすると思ったら……。

そこには、潤の中学で起こった自殺と判断された事件の全ての資料が揃っていた。

さっすがー。でも……。これ、警察のも入っているんですけど?

一体どうやって……?

まあ、いいか。気にしない気にしない。

「……ありがとうございます。えーと、なにになに……?」

俺は早速、真帆さんから提供された資料を一通り頭に入れる事に

した。潤も俺に習い、資料を眺める。

それによると、ここ十年で自殺した生徒は七名。うち、動物が同じ日に死んでいるのが記録に残っているだけで三名いた。

安藤翔／屋上から飛び降り、転落死。

井川優子／トリカブトを飲み、中毒死。

橋本拓人／プールに飛び込み、溺死。

「どうやら、花音の死も怪しくなってきたな……」

だが、死亡した当時の年齢及び日時、性別、出身地、部活動及び委員会活動、担任の教師。彼らにこれと言った共通項はない。うーん。やっぱり単なる偶然なのか……？

「……」

俺が頭を抱えていると、潤が何やら思いついたような、だが確信のないような、そんな微妙な顔をしていた。何でもいい、何かヒントになれば、そう思って俺は潤に尋ねる。

「？ どうした？」

「いや……この、橋本って人。確か何かの……数学か、理科か、の大会で優勝したとか、新聞に書いてあったような……」

「！？ 本当に？」

「え？ 何でそんなに驚くんですか？」

……確か、この安藤って奴も俺の一つ下だが、化学なんかで有名だった気が……。そうだ、ロボコンで入賞したとかで、表彰されたんだったか。それに、花音も勉強はかなりできる。特に理系科目は大の得意だったはず。こりゃ、ひよつとすると……。

「リュウ、さん？」

「……潤。今の理科の担当教師は？！」

「え？ えーと、確か金山先生、新條先生、あとは……あ！」

「？ どうした？」

「そっいえばこの前、花音、丹代先生たしろともめてたな……」

「?! 丹代って……あの!？」

「え? リュウさん知ってるの?!」

「ああ、まあ、な。そこまで知ってる訳じゃないが、俺が三年の時に入って来た先生だったはずだ。それで、何回か実験の時には世話になったな……」

「それだったら、話は早いですね……。実は花音、丹代先生と授業中に大喧嘩したんですよ」

「……」

あまりにも花音らしい話で、俺は思わず苦笑した。

俺の記憶が正しければ、丹代は化学を専門とする教師で、実験関連を主に取り仕切っていたはずである。ベテランなのに（多分今年で定年ぐらいの年齢だったと思う）常におどおどしていて、説明もとぎれとぎれ、用語は忘れるし、計算ミスはする、という、言っちゃああ悪いがあんまり良い教師とは言えない人だった。だが、一度実験器具を扱わせればその腕前はなかなかのもので、普段の行動からは予測も出来ない鮮やかな手さばきが、俺は結構好きだった。が……。いかんせん、それに行き着くまでにミスが多すぎるので、生徒からは若干なめられていたのが玉にきずである。

「でも、そんな事で先生が生徒を手にかけたりするんでしょうか……?」

「解らん……が、可能性はなくてもない。とりあえず、丹代に話を聞きに行こう」

「はい……って、え?」

「だーいじょーぶ、俺は被害者遺族だぜ? それに……」

数十分後。俺と潤は難なく中学に潜入、丹代から話を聞ける事になった。

「……まさか、トラ丸の飼い主が校長先生だなんて……」

校長室を出ると、ぼそりと潤はそう言った。

「まあ、まさかこの中学に転任してくるとは思ってなかったけどな。ま、これも一つの縁ってものだ」

トラ丸、とはこの界限では有名な迷子にゃんこである。前に仕事で探した事があり、それ以来校長とはちょっとした仲になっていた。「そんな事より、さっさと行こうぜ」

タイムリミットは明日の正午。それが、校長が引き延ばしてくれた記者会見の開始時刻だった。それまでに、決着をつけなければ。

トントン。

「はい、どうぞ」

『失礼します』

「やあ、龍貴君じゃないか。元気かね？」

奴の根城、実験準備室に入ると、丹代は笑顔で俺達を迎えた。

「……こんにちは、丹代先生」

「一体、何の用だい？ 突然訪ねてきて……。それに、参道じゃないか。何だ、二人して？」

「実は……今日亡くなった塚田花音は、俺の従妹でして」

一瞬、奴の顔がゆがんだように見えた。が、すぐに“被害者遺族を憐れむ顔”に表情を変更し、続ける。

「そう、だったのか。それは……気の毒に」

「それで、昨日その現場を見た人がいないかと思って、探しているんです」

「そうか……。でも私は見ていないな。塚田君なんて」

「そうですか……」

「力になれなくてすまん。だが、あれは仕方がない。彼女にも何か悩みがあったんだろうな。だからあんな真似を……」

しらじらしい、と思った。何となく全体的に芝居がかっているし、何よりいつもより饒舌だ。でも証拠らしいものは何一つないし、力マ掛けるのもな……。

「さ、用が済んだなら、もう帰りなさい。龍貴君はとにかく、参道

が出歩くにはもう遅い」

「はい……」

収穫なし、か……。諦めて帰ろうとした時、今まで黙っていた潤が、おもむろに口を開いた。

「あの、先生。あそこって、空いてますか？」

「？」

潤が指さした方向には、まだ何も埋まっていない花壇があった。

「か、花壇がどうかしたのかね？」

「いえ……。ただ……。花音に花を贈ってやりたくて……。もしあそこが空いているようだったら、何か植えようと思ひまして……」

「あ、あそこは昔から実験動物の遺体を吊う場所と決まっているんだ……。悪いが……」

「え？ でも、何か植えてあるじゃないですか。あそこ」

潤が指したプランター類。確かにそのほとんどには植物はなく、何やら札がささっている。多分、動物の名前なんかを書いてあるのだろう。だが、その中に何やら緑色をした一角があるのを俺は見逃さなかった。

「ああ、あれはきつと、ほら、あれだ。雑草だよ、今度草むしりしとかんとな！」

「でしたら、僕やっておきますよ。園芸委員ですし」

「！？ いや、あそこの担当は僕だからね、僕がやっておくよ。さ、そういう事だからね、早く、さっさと帰りなさい」

バタンツ。

「……お前」

見事なカマのかけ方だったが、一応たしなめておく。カマをかける、という行為は存外危険な事なのだ。

「あ……ごめんなさい。つい……」

「ったく……。まあ、お陰であいつが黒な事ははっきりした、が」
「……動き、ますかね？」

「……。解らん。が、待ってみる価値はある。……校長に会ってこよう」

「……。ふう、行つた。か？」

目聡い餓鬼だ。しかし……。あそこを嗅ぎまわられたら……。いや、いくら彼らでもそこまではしないか……。だが……。

プルルルル、プルルルル。

「！？ ……何だ、電話か」

いや、待てよ……。もしかしたらさっきの奴らか……？

私は動揺を悟られないようにして、受話器を取った。

「はい、もしもし……」

もしもし。丹代先生？

「その声は……校長！？ ……どうされました？」

ああ、そんなに大した事ではないんだがね。あのー、君が管理してる花壇があつただろう。近々その周辺の道路の工事をやるんだ。それで、ちよつとあの辺いじる事になつてしまったんだが……。良いかね？

「！？ え、ええ。勿論。構いませんよ？」

すまん、こんな時に……。だが、工事は待ってくれんなのでな。

では、そういう事で

ガチャ。ツーツーッ。

……。まずい事になつた。今アレが見つかったら、私は終わりだし！
仕方ない……。

深夜。誰もいないのを確認して、私は学校に忍び込んだ。
ザク、ザク、ザク……。

大丈夫、園芸委員会顧問でもある私なら、例えどんな植物を栽培していたって、例えば夜遅くに土を掘っていたって怪しまれる事はない。実際、それで今まで上手くいつてきたんだ……。大丈夫。何も

不思議な事はない。あれはどう考えたって、誰がどう見たって自殺だ。

ザシユ！ ガサゴソ……。

……さあ、さつさとこれを処分しまおう。そうすれば、誰もあれが殺人事件だとは思わない。あいつらが殺されたなどと思う人はいない。

そう、あいつらは自殺したんだ。

「はっ、はっはっはっ」

思わず笑ってしまった。その時である。

「そんなに、おかしいんですか？」

後ろに――あれだけ注意していたのに、いつの間にか龍貴君と参道、校長、教頭が私を取り囲むようにして、立っていた。

「……そんなに、生徒を殺して、邪魔者がいなくなった事が、そんなに嬉しいんですか？」

俺は問うた。答えによつては、俺が、俺自身が殺人犯になってしまつかもしれない、危ない問題を。

「な、何だね、いきなり。それに、校長、教頭まで……」

「……じゃあ、その手に持っている袋を渡して下さい」

いつものあどけなさが残る少年の声とは違って、かなり落ち着いた低い声で、潤は言った。先程までは無邪気に笑っていたりしていたので、それが何だか、逆に恐かった。

「これは……」

「神城君、やはり、丹代先生が犯人なのかね？」

「はい。あの袋の中身が、その証拠です」

「多分、クロロホルムやロープの余り、ハンカチ、手袋……。そんなものでしょうね」

「そんな……」

「何故……」

「こ、校長、それに教頭まで……。あ、あの子達は自殺でしょう？」
「それが、警察からの報告で花音の体内から睡眠薬の成分が検出されました。他の子ども達については解りませんが、少なくともこれで花音の死については、他殺である可能性が出てきました」

「それに……先生、あそこに植えてある植物って、トリカブト、ですよね？」

『え！？』

その潤の発言には、流石に驚いた。まあ、予測はしていた事ではあったが、やはりそうだったか……。後から潤に聞いたのだが、トリカブトは見た目案外普通の植物で、意外と花が可愛いので、何気に園芸店とかで売られていたりもするらしい。……伊達に、園芸委員なんてやってないという事が。

「……そんな、私はただ、花屋に勧められて買ったただけだ。そんな事……知らない」

「それに、複数の先生から夜中や早朝に、この辺りで穴を掘る姿が目撃されています」

「調べれば解る事なんですよ……？　それでもまだ、しらを切りますか？」

丹代は、そこでようやく黙った。少し、考えているようである。
俺はどうかこれで自首してくれば、と願った。そうでなければ、俺はともかく、潤が……。

だが、そんな俺の期待とは裏腹に、奴は開き直ったように続けた。
「何の事だか、私にはさっぱり。心当たりすらないよ。それに、教師の私が、どうして彼等生徒を殺さなければいけないんだい？」

「……花音達が先生に反抗したから、でしょう？」

潤は先程からの攻める姿勢を変えずに、一気に畳み掛けるようにして続ける。

「先生はプライドの高い人だ。だから、僕達みたいなガキに文句言われるのが、許せなかった、そうなんでしょう……？」

声は荒立つところか、冷静そのものだ。だが、それだけに内面の

怒りが露わとなっているように、俺には聞こえた。

そうか、さっきまでは無理に明るくふるまっていたのか。俺と一緒に、犯人捜しをする為に。でも、これは弔い合戦なのだ。犯人を見つけて、証拠まで揃っていたら、それは追いつめて裁くのが自然解ってはいた。というか、むしろそれが当然で、俺も前まで——成田さん親子に出逢うまで——だったら、そうしていただろう。だが、違うのだ。それでは何も変わらない。俺はそれを知った。だから、潤にも教えてやらなきゃいけない、そう思っている。だが。騙された。あまりにも、あまりにも自然に接するから——いや、幼馴染が死んだ割には冷静すぎると思ったけど、俺はその不自然さを頭の隅に押しやっってしまった。——。何だ、結局俺の所為か。俺がいながら、何て様だ。だが——

俺が自分の浅はかさに気付いた頃、潤の怒りが彼の気に障ったのか、あるいは凶星をつかれた所為なのか、丹代は急に態度を豹変させて狂ったように語り始めた。

「……ああ、そうさ。あいつらが生意気なのが悪いんだ。俺に教えてもらえなきゃ、なーんにも解らないくせによう。ちょーっと他より賢いからって、調子に乗りやがって……。どいつもこいつも……。大体でめえらが

「よくも……この！

「丹代先生」

潤が丹代に飛びかかる前にその気配を察知した俺は、潤を制するとともに、その場に割って入った。……俺にだって、言い分はあるのだ。それに、ここで潤を暴走させる訳にはいかなかった。それは探偵の先輩として、そして何より花音の従妹として。それに、これは俺のミスでもあった。だから、自分の落とし前ぐらい自分でつける。

「……いや、丹代さん。子どもが何も知らないのは、当り前の事じゃないですか。だから、教師がいるんでしょう？ そりゃ、彼等はまだ子どもですから、分からない事があれば先生を責めなくなっ

りもしますよ。でもいつか、大人になって先生から教わった事が役に立った時、そこで初めて、先生に感謝したり、教育のありがたみってヤツが解つたりするんじゃないでしょうか？　それが、教師つてものじゃないんですか？」

「・・・」

丹代は静かに、俺の話を受け止めてくれたようだ。
そしてダメ押しは……。

「丹代先生、神城君の言うとおりです。私達は、子ども達に“与える”事はしても、“奪う”事だけは決して、してはいけないんですよ」

「こ、校長……」

実に重みのある、教師としての心得のような、そんな格言的な良い台詞だった。

その一言は、彼の心に大きなダメージを与えたようだ。

「さ、行きましょう。教頭先生、あとはお願いします」

「神城君、ありがとう」

「いや、別に……。というか、最後においしいトコ、校長に持つていかれましたね……」

折角、俺が決めようと思っていたのに……。まあ、潤の事ならともかく、丹代には校長からの言葉の方が効くだろう。

「ああ。まあ、あれはいいじゃないか。……しかし、まさか殺人の証拠をまさかこんな所に埋めておくとは……」

「ま、“灯台下暗し”ってやつですよ。実際、今まで見つからなかったんだし」

「そうか……。さて、じゃあ私はこれで。本当にありがとう。参道君も」

「いえ……。何かすみませんでした……」

潤の毒気はすっかり抜けたようだった。それを校長は目を細めて、温かいまなざしで見ていた。そして潤の頭の上に手をポンっと乗せ

て、それから言った。

「気にする事はないさ。……私は私に出来る事をするよ」

その日、記者会見が開かれ、正式に丹代が犯人だと発表された。

*

一カ月ぶりに会った潤は、少したくましくなったようである。

潤は先に立ち去った。

俺は花音にいくつか話しかけた後、帰り際に持参した花を供えようと、足元を見る。そして、その時、初めて潤の持ってきた花に気が付いた。

その花は、俺の持ってきたものと同じもので、花音が一番好きだと言っていた花でもあつて、

そして奇しくも、花音が吊るされた木でもあつた。

その花は春に咲き、白や薄紅、紫の美しい色で私達を和ませる。

若者たちよ、どうか、せめて、安らかに――。

木蓮花（後書き）

若干ご都合主義な感がありますが、ご容赦ください。
これにはこれで意味がある…はずなのです。

そして、今回で過去編は終わりです。次から第二幕となります。

燕子花（前書き）

このお話から第二章、現在編に突入です。
高校生になった潤のお話です。

燕子花

長い長い、冬だった。

それをやつと乗り越えて。

落ち込んだ心に鞭打って必死に勉強して。

そしてついに。僕は無事、第一志望の学校に合格する事が出来た。

その高校に進学したのは、つい先月の事。

“初めての場所”、というのは緊張感漂い、新鮮な感じがするものであるが、一日二日、一週間一月と経つにつれて、そんな感覚は徐々に薄れ、全ては“日常”と化していく。

所謂、“慣れ”という奴である。

僕もその定説に漏れることなく、ある意味すこぶる順調に高校生活を送っていた。

また退屈な日々が始まるのか、と若干憂鬱になりながらも……。

だが、そんな杞憂を打ち晴らすかのように、あれは突然僕の目の前に現れた。

空想の産物が初めて実体となって、具現化したあの瞬間^{とき}。

あの日から、僕の日常^{まいにち}は退屈を忘れたのだった――。

*

「はい、という訳で、今年も校外学習という名の遠足の季節がやってまいりましたー」

授業も終わり、だらけたムードとテンションの低さ漂うホームルームの時間。我が担任教師は妙に浮足立ったご様子で、教室に入るが否やそう切り出した。

……うん、この担任だけにはなれたくないな。

いきなり始まった先生の一人劇場に取り残された観客はただ、ぽかーん、と口を開けてそれを眺める事しか出来なかった。

「うん？ どうした？ …… 嗚呼、皆は一年生だからまだ知らなかったか……」

一応観客の事を気にする道化だったらしく、先生はつらつらと説明し始めた。

うちの高校はそりゃあもう進学校には珍しいぐらいに行事がある事。

その一つが各クラスばらばらに行く校外学習である事。

そしてその行き先は先生がもう決めてしまった事。

要約すればその三点に収まる内容を、先生はあらゆる話法を駆使して何と三十分程語った。

そしてその行き先とは――

「……美術教師が美術館を勧める、って、どーよ？」

僕の友人がぼそっともらしたように、割と近所にあるこの市で一番大きな美術館だった。

何でも、先生はその美術館の設計かそこにおいてある作品の寄贈かなんかに貢献したとかで、ちまっとした個展をその美術館で、しかも常設でやらせてもらえる事になっているんだとか。

まあ要するに、自分の作品を生徒に見せつけたかったのである。

ただそれだけの為に、彼は学校の行事でさえも（毎年）利用しているのだった。

どこぞの独裁者も吃驚の手法だ。まだ空き地のオンステージが可愛く見える……。

「まあ、タダで入れるってのは嬉しいけどね」

確かに。それだけが唯一の救いと言えよう。

まあ、学級委員なんかは

「先生、この校外学習は生徒が自主的に、目的からきちんと話し合っ
て決めて主体的に学ぶ場だと聞いていますが……」

等と、眼鏡をくいつと上げながら反論していたが。しかしそれは、
クラスのマードメーカーによって

「まあいいんじゃない？ 先生が折角決めてくれたんだし」

と一蹴されていたけれど。（その後彼女は、「で、先生。行き先は
そこで良いけど、その後は何しても自由だよね？」と先生まで丸め
こみ、午前中美術館、午後公園でドッジボール大会という無茶苦茶
な計画を打ち出したのだが。むしろこいつが一番上手なのか？）

まあそんなこんなで。僕達は今美術館に居る。

皆適当に散らばって、適当に作品を眺めている。まあ、そんなに
悪い作品も入ってないし、今は有名な彫刻家の作品が一時展示して
あるので、一時間程度であればそこそこ、普通ぐらいには楽しめる
のだ。これは彼女のナイス作戦によるところも大きいだろう。

が、その一方で。何故か僕だけ担任に

「お前は来てくれるよな？」

と攫われて、プレハブというにもお粗末な、美術館と辛うじて繋が
っている仮設テントつばいものの中に居る。そこで先生の個展はこ
じんまりと、ちんまりと行われていた。

「わあ……」

そこには、作品と言って良いんだかよく分からない品々が、所狭
しと並んでいた。

その中にいくつか、ちらほらと点在する、まともな作品。有名な
作品のレプリカたちだ。絵画や彫刻、オブジェなど、形態はばらば
らだったが、一応、この担任教師、出来る奴らしい。そこそこ普通
に見られる程度、いやそれ以上。もしかしたら本物を見た事のない
人なら普通に騙せるんじゃないか、ぐらいのレベルだった。

で、それに関してちよつと褒めたら、目を輝かせていつもの倍の
ペースで長々と解説を始めてしまい、まずったなあそろそろ帰りたい
なあ、と思ったその時、

「おい、何だこれ」

「ほら、あれじゃない？ 例の……」

にわかに本館の方が騒がしくなって、僕は逃げる口実を見いだせた。

小走りで皆の所に戻る。と、

「おい、参道！ 見ろよ！ 予告状だつてよ！」

別の友人が教えてくれた。

「俺こんなの初めて見るよー、なあ？」

「うん」

……初めてじゃなかったらむしろそっちのが驚きだよ？ まあそこはおいといて。

皆それぞれに驚きを表現している。……まあ、ほとんどは面白半分やつかみ半分。目を輝かせて、ここが美術館である事もすっかり忘れてきやいきやい騒いでいるだけだったが。

僕も人垣をかき分け実物を拝む。すると、どうやら今世間を騒がせている怪盗の仕業である事が読みとれた。

「いや、この時代に怪盗？」とか思ったそのあなた。そちらの世界にはいないかもしれないけど、実は見えていないだけで怪盗っているんですよ？ どの時代でも。我が街にはたまたま根付いている？ というか昔からいる？ だけで。

更に近づいて、きちんと全文を読む。

「ご機嫌麗しゅう館長殿。貴殿の趣向は大変素晴らしく、私は常に感服している。この度も上質な作品を提供していただき、感謝する。貴殿が所有されている“天使の嘆き”を頂戴に今宵丑三つ時に参上する。 怪盗セゾン」

……いつも思っただけど、この怪盗、自分の良いように物事を捉え過ぎだよな。

“天使の嘆き”というのは、さっきも言った有名な彫刻家の最新作で、どうしてこんな田舎町の美術館にあるのが解らないぐらい、価値のある作品だ。そういえば、ここ昔にも怪盗に入られた事があったんだっけか……。その時はまんまと作品を盗まれてしまい、信

用はがた落ち。警備を強化して、街の小学校の展覧会とかやって地域に貢献して、何とか元通り普通の美術品を扱えるようになったっていうのに。その矢先にコレか……。

ってな訳で。その後は美術鑑賞なんて出来るはずもなく。騒ぎを聞きつけた館長がパニックったり、警察が飛んで来たり、ミーハーな警備員が小躍りしたりで、辺りは騒然となった。僕達は予告状を見つけた当事者として、警察の人から事情聴取される事に。

そんなこんなで解放されたのは午後三時。当然、その後に公園レクをやるうなんて言い出すような人はなく。っていうか校外学習の予定終了時刻だったので、皆大人しく帰宅しようという雰囲気になり、僕も友人たちと共に家路へ足を進めようとした。

すると、規制線の張られた中に知り合いの姿が見えた気がしたので、僕は友人たちと別れ、そちらへ歩を進める。

「リュウさん」

リュウさんは警察の人と何やら難しい顔で話をしていたが、僕の姿を認めると話を切り上げてこちらに近づいて来てくれた。

「おお、潤。……もしかして、第一発見者ってお前の学校か？」

「はい。えと……リュウさんは何故？」

すると、すごく微妙な、強いて言うなら嫌そうな苦虫を噛み潰したような、そんな顔で、吐き捨てるようにこう言った。

「……あんまりこういうの言いたかないんだけどさ……。まあ所謂“因縁”ってやつなんだ。俺とセゾンは」

……。マジ？

いやいやいや。いくら尊敬して止まないリュウさんとも言えども！僕の探偵の先輩である神城龍貴さんとも言えども！黒髪短髪好青年である事を差し引いても！それは！あまりにも！ベタ過ぎる！探偵と怪盗の因果関係なんて！使い古されたい回しにされ最近では若干敬遠され始めてきたにも程がある！

そんな僕のこれまた微妙な表情を見て、目をそらしつつ耳を赤らめながら、リュウさんは声を裏返しながら極めて明るくふるまった。「と、兎に角。この天使像を守らなきゃな！」

……つと、そうだった。その為にわざわざ声を掛けたんだった。

「それなんですけど、僕にも参加させて下さい」

「え……？ お前が……？ うーん」

？ あれ？ いつもなら二つ返事で“ああ、いいよ”と言ってくれるリュウさんが珍しく悩んでいる。どうしてだろう？

その理由は、あまりにも簡単で、どうして僕は思い至らなかったのかが不思議だった。

「いや。それがな、今回の予告時間、夜中、それも深夜なんだよ」

……嗚呼。成程。

僕は世間的に、まだ十五歳。そんな子どもをそんな夜遅くまで連れまわす事は、あまり、というかなり宜しくない。現実はどこぞの小学探偵のようにはいかない、という訳だ。

うーん。

「……でも折角の機会ですし、何か僕にもお手伝いさせて下さい」

「そうだな……。じゃあとりあえず、この美術館の簡単な見取り図と、今回の警備の説明だけするわ。……実はな、ここだけの話、俺にも警察側にも勿論美術館の関係者にも真帆さんにさえも、これといて良い作戦がないんだよ」

「はあ……つて、え！？ 真帆さんにも！？」

「ああ……」

成田真帆さん。安楽椅子探偵としてこの世界では知らない人はいない、超有名な美人探偵。その彼女にさえも策が思いつかないなんて……。一体どれだけすごいんだ？ その怪盗セゾンって奴は。

「奴には赤外線のスラップも警察の厳重な警備も通用しない。いつの間にか現れ、そしてお宝と共に去っていく。お前も聞いた事ぐらいはあるだろ？」

そつえば……。怪盗セゾンって、どんな強固な守りでも突破し

て盗みを働く、文字通り狙った獲物は逃さない怪盗だったっけ……。
「そんな奴相手に一体どうすりや美術品を守りきれるんだか、俺達には見当もつかないって訳。……せめて、今日いきなりじゃなければもうちょいまともに準備が出来るんだがな。それでも、最低限今出来る策は全て巡らしたつもりなんだが……。何か見落としてるものがあるかもしれないし、もしかしたらもつと良い策が浮かぶかもしれない。その辺、ちょいと考えてくれると俺達としてもありがたいんだが……？」

「はい……」

でも、考えるって言っても、僕に思いつける事は限られてるし……。っていうか、僕が考えつくような事ならもう作戦の中に組み込まれてるだろうし……。うーん。

そこでうだうだ考えても埒が明かないので、一応、リュウさんの説明を一通り聞かせてもらおう事にした。

元々ある設備として、監視カメラと赤外線。

そして嚴重な、ありの這い出る隙間もない警備網。

勿論、美術品はガラスケースの中に安置。

うん、これだけやってれば充分だと思う。っていうか、それ以上の事は僕には思いつけない。さて、どうしたら……？

「……何とかあの天使像だけでも守りたいんだがな……」

考え込む僕を見て、半笑いで少し寂しそうに言うリュウさん。確かに。もし仮に入られてしまっても、何とか美術品だけ守る方法は何かないのか……。ん？ 待てよ……。

「あの……」

「ん？ 何だ？」

「要は、美術品を守れば良いんですよ？」

「あ、ああ」

「だったら、僕に考えがあります」

盗むなら 盗ませてやれ 好きなだけ

その作戦はあまりにも簡単でお粗末なものだったが、だからこそ

僕にしか思いつけないもののように思えた。実際、その事を思いつけそうな館長でさえ、忘却の彼方にやってしまったのか僕の策を聞いた時、

「嗚呼——」

と懐かしむような表情をしていた。

リュウさんも、

「確かに。突然の事だからそんな物ないと思っていたが……。そうか、それなら行けるかもしれない。でかしたぞ！ 潤」
大賛成してくれた。

そんな訳で。急ごしらえな感じではあるが、一応、僕の策と警察の厳戒態勢で怪盗を迎えることとなった。らしい。僕はその後帰されてしまったので、詳しい事は知らない。

だが実際、後からリュウさんに聞いたところ、怪盗は律儀にも、その夜真夜中深夜12時きっかりにやってきたんだとか。

深夜二時過ぎ。急に電気が消えたかと思ったら、気が付いた時にはもう天使像はそこにはなかったらしい。

ちなみに、きちんと配電盤の所にも刑事は配置していたし、入口出口共に封鎖はしていた。ものの、全員声を上げる暇もなく眠らされていたんだとか。

まさに神業。誰かが無線で連絡したりしたらものすごくばれそうな、綱渡りのような策ではあるのだが……。怪盗は運も味方につけているらしい。

まあ、それでも。勝ったのは僕なだけだ。

一方、とある怪盗のアジトでは。

「さつてと、ではでは今回のお宝を拝見しましょうかねえ」

「ごそごそごそ。いやあ、今回の仕事も簡単だったねー。等と鼻歌交じりで言いながら、上機嫌で袋から盗んだお宝を取り出す怪盗。だが、像の後ろ側を見た途端、一瞬顔が青ざめる。そして、怪盗は微笑みながら、こう呟いた。

「なかなかやるじゃん。参道潤君」

像の後ろ側には、小さく“と”と書いてあった。

ちなみに。潤の担任教師の名は、“戸川”と言う。

*

「いやあ、今回はお手柄だったなあ、潤！」

「いえいえ。僕はただ運が良かっただけです」

成田探偵事務所にて。今日は、今回の僕の働きに対するささやかなパーティーが行われていた。

「うん、でもすごいと思うな。潤君、段々探偵っぽくなってきましたねー」

真帆さんから褒められると本当に嬉しくなる。

実際、僕はその時頂天だった。

だって、巷で話題の怪盗セゾンを出し抜いたのだ。この僕が。一介の高校生にすぎないこの僕が。成田さんも警察の人もリユウさんも差し置いて、この僕が！

本当に嬉しくて仕方がなかった。

でも、その時僕は知らなかった。

実は自分が最も嫌悪しているはずの“事件”と言う奴を、僕は求めるようになってしまった、という事実を。

それどころか、それを自らの手で解決し、人を出し抜く事に快感を

覚えてしまった現実を。

犯罪を愛するようになってしまった未来を。

僕はまだ知らずにいた――。

燕子花（後書き）

すみません。諸事情ありまして直しました。

詳しい理由は活動報告欄の方に書いてあります。

また、設定部分のミスで、潤の年齢を14歳という風に初回では表現してしまいましたが、彼は15歳です。

すみませんでした……。

牽牛花

「夏だ、休みだ、合宿だ」

そんな、体育会系の部長が学生旅行のパンフにしか載らなくなつたような台詞を吐いたのは、ご存じクラスのムードメーカー、穂村である。

時は七月。期末テスト明けの、あるまじりとした午後の事だつた。

『ええええええええ』

当然挙がるクラスメイトからの野次。

「何で合宿なんだよ」

「大体、俺らにも予定つてもんがあんだよ、なあ？」

「ねー」

がり勉から、クラス公認のバカップルまで、タイプは様々だったが、その言い分は同じだった。要するに。

《何で夏休みにクラスの奴等と一緒に合宿なんかに行かなきゃいけないんだ！》

という訳である。

別にこれは我がクラスの中が悪い、という事ではない。ただ単に合宿という響きのついたものに行くのが面倒なだけなのだ。しかも

……

「合宿、いいじゃん」

と、我が担任がノリノリなもの、皆の行く気をそいでいる元凶なのかもしれない。

まあ、そんなこんなで。ぎゃーぎゃーわーわー。自体は一向に執着する気配を見せない。そこで頼りになる存在と言えば……

「ねえ、委員長。委員長はどう思う？」

クラスの学級委員長様である。

「え？ 私？ ……そうね、良いんじゃないかしら？」

『え！？』

驚く面々。それは反対していたクラスメイト達だけではなく、穂村や先生にまで広がっていた。……って、僕の個人的な質問だったんだけど？ まあいいか。それだけ委員長の発言力が大きいという事であるう。

「だって、こんなに穂村が頑張って計画立ててくれているんだもん。予定が合わない人は仕方ないにしても、まずは話だけでも聞いてあげましょうよ」

うん、流石委員長。陰の担任（この場合は表でも良い気がする）である。彼女の言葉と慈悲深い笑顔に皆納得して、大人しく穂村の話聞く態勢に入る。教壇でばかんとしていた当人も、長い髪をがしがしとかきながら、

「じゃ、じゃあ、説明させていただきます……」

と、いつもの強気な姿勢もどこへやら、おずおずと、借りてきた猫のように話し始めた。それによると、行き先はある海辺。何でもそこに穂村の知り合いが経営するペンションがあるらしいのだが、何故かは知らないがものすごい寂れているらしく、海辺にある割には夏だというのに人が入らないらしい。ので、

“それなら友達連れて今度遊びに行くよ！”

と安請け合いをしてしまったらしい。いかにも穂村らしい話だ。で、どうせなら人数が多いほうが良いであろうという事で、僕らも巻き込む事にしたのである。

「……まあ、そういう訳で。経営難の私の知り合いを助けると思っで。勿論、費用はなるべく抑えるし、絶対後悔はさせないから！」

とまあ、最終的にはいつもの強気な口調に戻っていた訳だが。それはともかくとしても。

「何だ。案外楽しそうじゃん」

「合宿っていうから、なんかこう、もっと厳しいもんだと思った」

「普通に旅行じゃん。それならそうと早く言ってくれば良かったのに」

皆の雰囲気が悪くなった事が目に見えて分かった。実際、僕もそれなら行つて良いかな、と思い始めていたし、めんどくさがりな僕の親友、鈴笠も、

「まあ、安けりゃいいんじゃない？ どーせ一泊二日ぐらいなもんだろ？」

と、乗り気になるほど。そして更に、調子に乗つて来た穂村は、宣伝文句を列挙する。

「嗚呼、勿論、そこで勉強したつてトレーニングに励んでもらつたつて一向に構わないけど、私の目的はあくまでも皆に息抜きをしてみらう事だから！ 日程は皆の邪魔にならないように一泊二日、そのペンションはここから一時間ぐらいの所だから、移動もそんなにかからないわ。今度地図を出しますが、駅の近くなのでそこに集合という形にしようと思います。ここまでで、何か意見ある人ー？」

……何だ。そこまで考えてあつたのか。じゃあもう文句は言うまい。でも、何か引つかかるんだよねー。そこを解決してくれたのは、鈴笠であつた。

「いや、ここまででは別に何も無いんだが、一体何やるんだ？」

『あ』

確かに。肝心なそこを聞いていない。どうせ穂村の事だから、また何か考えているのだとは思うけど……。そんな僕らの期待と不安を知つてか知らずか、本人は笑顔でこう答えた。

「それは私に一任してほしいな」

その後、当然“えゝ”というクラスメイトからの不満は拳がつたものの、我が担任の

「はっはっはっ、まあ、いいんじゃない？」

との、何とも適当な、失礼、生徒を信頼しきつたお言葉により、その場は収束した。

まあ、そんな感じで。魔のテスト返却が終わり、校長先生のありがたーい長ーいお話を聞き、要らないなあと思いつつも通知表をい

ただき、ようやく夏休み。僕達は合宿という名の避暑旅行——いや、後にそれも間違っている事に気が付くのだが——に来たのであった。結局、なんやかんやでクラス全員で来る事になり、ペンションのマスターは大喜び。家族総出で僕達を温かく迎え入れてくれた。

「いらっしやい！ ゆっくりして行つてね！」

『うわあ〜』

経営難のペンションというから、てっきり寂れた、古ぼけた建物だと思っていたのに、そこは予想していたよりも広く、また小奇麗な所だった。エントランスは花や絵画に囲まれて華やかだし、掃除も行きとどいていて不快感は全くしない。何だ、普通に良いじゃん。友人達もその外観に見惚れ、次々に賞賛する。ところが。

「うーん。惜しいな……」

我が担任だけは納得がいかなかったらしい。

「何がです？」

一応、一番近くにいた僕が生徒を代表して尋ねる。

「ここにはもつと暖色系の絵画を置いた方が華やかになる気がする。それと、やっぱり玄関にはオブジェの一つぐらい」

「さあ、部屋割り決めるよー」

『おー』

全員一致団結の、見事なまでのスルーだった。

その後、各自部屋に荷物を置くと、早速、日程は開始された。

まず、地元の漁師さんご協力の元、地引き網漁を体験させてもらう。網は案外重く、なかなか引き上がらない。一時間後、ようやく陸に上がって来たその中には、大量の魚で埋め尽くされていた。自然とわき上がる歓声。昼食はその新鮮なお魚にありつけた。

——こんなに美味しい魚を食べたのは久しぶりだ……。

自分で苦労して捕ったのと、皆でわいわい食べるという楽しさもあいまって、更に美味しく感じた。

食後は自由時間。室内で休むもよし、海岸でビーチバレーをする

もよし、海に入って遠泳をするもよし。皆それぞれ思い思いに、ゆったりとした楽しい時を過ごした。

———そういえば、去年は必死になって勉強していたからな。というか、僕の場合はそうでもないと感じ落ち着かなかったただけか……。

そんな感傷に浸っていると、

「おい、潤！ 全員集まれってよ！」

友人に呼ばれ、僕は現実に戻ることが出来た。

海岸には何やら見慣れた道具達——先程も大活躍だったバーベキューセットと飯ごう、調理台の上にはニンジン、ジャガイモ、タマネギ……。つて、まさか！？

「まあ、臨海学校と言ったらカレーでしょー」

という事で、夕飯は皆で作る事になった。そしてやっぱり臨海学校だったのね、これ。

時間もないので適当に分かれ、各々調理にとりかかる。ところが

……

「痛っ」

言い出した本人が、めちゃくちや不器用だった。いつもは下ろしている髪を、気合十分、ポニテにして臨んでいたというのに……。残念過ぎる。他の皆は割かし普通に、ジャガイモの皮をむいたり、玉ねぎを炒めたりしているというのに。そんな穂村は見かねた委員長に「ほら、貸して」

と、やんわりと皮むき班を追い出され、お皿を出したりスプーンを用意したり、と雑用係となっていた。

一方、僕はというと。

「おっ、潤。なかなかやるじゃん」

「えへへ」

料理の名人でもある真帆さんに仕込まれているので、腕はなかなかのものである。次々と渡される野菜たちを、いとも簡単にむいていた。

『おお』

沸きあがる歓声。って、そんなんで注目すな！ とまあ、若干照れながらも、僕は楽しく調理をしていた。

「……やるわね」

そんな様子を穂村が見ていた事に、その時僕は気がつかなかった。

その後、カレーは無事完成し、このペンションのどこにしまつてあつたんだ？ というぐらい大きな机を皆で囲んで、夕食タイムと相成った。

「お。何これうまつ」

「委員長の味付けが良かったんだよ」

「いや、俺は潤の手際の良さだと思うね！」

パクパクムシャムシャ。

BGMは皆のおしゃべり。こんなに大勢で過ごす事はほとんどなかったので、初めは違和感があつたが、今ではもうそれが心地良くなっていた。

——そっか、明日にはもう帰っちゃうのか……

そんなことを、考えてしまうほどに。

「なあ、花火やろーぜ！」

「良いねえ」

「食後にスイカはいかがかな？」

「わーい」

パチパチ、わー、どこっ、わー。

食後は浜辺で腹ごなし。僕も鈴笠と、線香花火の灯りに癒されながら、スイカ割りの様子を見物する。

そんな、のんびりと、まったりとした時間を過ごしていたら、

「参道君」

「？」

「ちよつと、良い？」

穂村に呼び出された。

「……ねえ」

「何？」

「器用さを認められたのは良いけど、それで何故お化け役……？」

「ま、まあ、乗りかかった船だと思って」

「そもそもチケットすら買ってないよ？」

「ま、まあ、良いじゃん」

「・・・」

“臨海学校”のしめと言え、やはり肝試しである。

今回も例外にはもれず、ペンションからすぐ近くの“絶好の肝試しポイント”（byオーナー）を使用させていただき、墓を通り抜け、林を抜け、山奥の寺にろうそくを置いて帰ってくる、というオールドックスなものをやる事になった。しかし、いつも思うのだが、どうしていつも良い位置に神社やお墓があるのだろうか……

そして、まあさっきの会話ですでお分かりかとも思うが、何故か僕は器用さ（？）を認められ、穂村と、それに委員長、僕の隣にいたからというただそれだけの理由で鈴原も一緒に（あれ？ むしろ彼が一番の貧乏くじ？）、裏方のおどかし役をする事になった。

——まあ、良いけどね。僕、お化け屋敷とか苦手だし。

彼女が用意したグッズは、割かし普通、というか一般的な、こんにやくやシーツや火の玉などだった。僕達はそれを持って、手分けして配置につく。ポイントは二カ所だったので、公正で公平なるじやんけんの結果、僕と穂村、委員長と鈴笠がペアになり、それぞれ墓と林の中で配置につく。そして

「わー」

『きゃー』

「うらめしやー」

『あ、おっー』

そんな感じで、恐がらせているというよりはむしろ一種のお約束のように、童心に帰って楽しんでいた。うん、すげえ夏休みっぽい。

で、粗方片付き、そろそろ引き上げようとした時――

「あ、帰り方分かんない……」

事件、
というか事故、
は起こった。

「ええええええええええええええええええ」

ちよ、ま。主催者が道に迷うって！ 何それ聞いてない。

まあ、入った時に迷いそうな所だな、とは思ったんだけど……。

穂村が自信満々にずんずんどこか奥に入っていくから……。

「だ、大丈夫よ！ ほら、あつちに明かりが見えるから、その方向に進んでいけばきつと辿り着くって！」

「……明かり、向こうにもあるんだけど？」

「え？」

「っていうか、そこかしこにあるんだけど？」

「え、えええええええええええええええええええええええ！」

僕らの学校からそう遠くない位置にあるという事は、大して田舎の方には行っていない。裏を返せば、まだここは都心部に、住宅街に近いという訳だ。

当然、明かりなんかそこかしこにある。僕はてつきり、それが担任の氣に障ったのかと思っただぐらいだった。

まあ、そんな訳で。

「?」

「最悪、このまま、野宿？」

「か……」

林、というか山の中。ただでさえ薄暗いであろう中を夜動くよりは、朝動いた方が効率的にも安全的にも良い事は明白である。だが。

「野宿……」

「ほ、ほら、シートもあるよ?」

「それは布団の上に引いてほしかった……」

「はあ」

最後にして、どうしてこう間が抜けているのかな……。

計画は大胆かつ繊細。言い出したのは急だったが、この旅行の費用を一泊二日、三食付（地引網体験含む）で一万円ぽっきりに収めたり、遊ぶときには遊び、休むときには休むという細やかな配慮もなされていた。

だが、ちよいちよい間の抜けたところ——手先が不器用だったり、帰り道を忘れたり——も垣間見えた。

まあそれが、彼女の良さであり、同時に悪いところでもあるのだろくな……

今日という一日で、僕は“穂村那央子”^{ほむらなおい}という、クラスのムードメーカーの少女について、いろいろ分かった気がする——

そんな感慨にふけていたら、

「潤ー、穂村ー！」

神の声が聞こえた。

否、近づいてきたらそれは神ではなく

「！？ 鈴笠？ それに委員長も」

僕の友人たちだった。

「あんまり帰りが遅いから、迎えに来たの」

流石委員長！ 助かった……

「このは！ 助かったわー。ありがと」

穂村もほっと、胸をなでおろす。

「さあ、帰りましょう」

こうして、穂村プロデュース、臨海学校“皆の交流を深めちゃおう！”（後から彼女に聞いたら、実はそういう狙いもあったらしい。どうも、この前の遠足でレクが出来なかった事を気にしていたらしいのだ。別に穂村のせいじゃないのに）は幕を閉じた。

僕の高校生最初の夏は、そんな普通の、楽しい日々だった。

牽牛花（後書き）

今回は夏休み、という事で比較的明るめに、楽しい感じにしてみました。

僕の夏休みはまだこないなので、彼らには十分遊んで行ってもらいたいものです。

火蟲草

穂村プロデュースの臨海学校の際、一組だけ仲睦まじく、常に一緒にいるカップルがいた。我がクラス公認、幼稚園の頃からの幼馴染だという彼らは、小学生の時にお互いの事を好きになり、中学の時から付き合い始め、同じ高校を目指して共に努力してきた、という何とも微笑ましいバックグラウンドを持つ。

実際、普通の学校生活でも、朝夕の登下校は常に一緒だし、休み時間になれば常に彼女——太谷伊紀おおや いきの方が、彼氏——宝生知景ほうしょう ちかげの席まで出向き、楽しそうに和やかに話をしていた。

そんな彼らの姿を、最初こそ疎み、羨んだものの、今では皆、微笑ましいその様子を温かく見守っている。

だから、僕は考えもしなかった。まさかそんな二人の間に、思いもよらぬ葛藤があつたなんて。否、誰も彼らの間にそんな事があるなんて、思いつかないだろう。

ただ一人、今回の被害者にして最大の加害者、太谷伊紀を除いては。

文化祭の準備真っ最中の、ある暑い夏の日。

夏休みも終わりに近づき、追い込みに入つた時期で、皆てんこ舞い。こういう行事が大好きな穂村がクラスを盛り上げ、頼れる皆の委員長が陣頭指揮をとっているの、まだ我がクラスはまとまっているものの、そんな団結力でも手に負えない量の仕事が、僕らを待ち構えていた。

僕も何故か衣装班に配属され、冷房の利きが悪い教室の中で、一心不乱に縫物をしている。他の者も皆、それぞれ自分の仕事を黙々とこなしていた。

だから、そんな中で誰が今どんな仕事をしているか、ましてや誰がいて誰がいなかったなんて、気が付けという方が無理だろう。それ

にもかかわらず、パートナーの不在に気が付いた彼は、流石というべきか……。

「なあ」

「？」

突然、目の前に影が出来たと思ったら、上の方から声がした。裁縫をする手を止めて目線を上げる。そこには汗だくの宝生がいた。

「どうした？ 何かあったのか？」

宝生は確か大道具のリーダーを任されていて、今は外で組立てとペンキ塗りをやっていたはず。その彼がここにいる、という事は……。

絶対、何かがあった。

「いや、大したことじゃないんだけど……」

少し気まずそうな宝生。だが意を決し、僕の耳元で囁いた。

「伊紀、見なかったか？」

「太谷さん……？」

そういえば。今日は彼女の姿を見ていない。てつきり、何か予定があつて来られないものだと思つていたけど……

「いや、今日も朝一緒に来てはいるから、いないはずはないんだが……」

と、少し照れくさそうに言う彼。ふむ。ならおかしいな……。

彼女は僕と同じ衣装班で、髪飾りなどの細かいパーツを担当している。特に部活動にも入っていない彼女は、暇を見つけては顔を出し、製作にいそしんでくれたので、僕達は結構頼りにしていた。そんな彼女だ。学校に来ているなら、ここに来ない訳が無い。

「いつまで一緒に？」

少し心配になった僕は、話を聞いてみる事にする。いや、普段なら人のプライベートに立ち入るようなまねは極力避けるのだが、今回は宝生のあまりの必死さに、心を動かされる形となった。

「朝……九時頃来て、それから見てない。一応、校舎の中までは送

「つてつたんだが……」

「教室に入ったかどうかまでは見ていない、と」

「そういう事だ。しかも、メールしても、かれこれ三時間、返ってきてない」

ふむ。成程ね……。そりやおかしいかも。いつものあの様子なら、十分あればどんな状況でも返信してきそうだな。だが、これだけでは彼を不安にさせるのにはまだ足りない。まだ、何かあるはずだ。

「……納得いかねえ、つて顔してんな」

「！？ ま、まあね……」

まずい、読まれた。そこまで立ち入るつもりはなかったのに。宝生がこんなに人の表情読むの上手いなんて……。あー、でもそうか。でなかったら、太谷さんとは付き合えないか……。太谷さんは恥ずかしがり屋で、あまり多くを語らない人なのだ。

「……これだよ」

差し出されたのは、彼の携帯。そこには一通のメール。差出人は、勿論彼女。携帯を受け取って、全文を読む。流石にメールだから、ものの数秒で読み終わる。や否や、今までやっていた作業を放り出して、僕は教室を飛び出した。

「お、おい！ どこ行くんだよ！」

宝生があんなに不安になるぐらいだから、てつきり怨み事が辛み事がずらずらと書き連ねられているものだと思ったのに。

彼から渡された文面は、僕の想像よりもはるかに短かった。

“私は、知景の事が大好きでした”

確かに、普通に見たらこれは、付き合っていて好き合っている者同士の、甘い掛け合いのようにも取れるかもしれない。が、問題なのは時と場合だ。まず第一に、このメールは今時珍しいほどに早寝早起き、その一見するとチャラそうな見た目と違い、規則正しい生活を送っている宝生なら、もはや寝ている時間、零時ジャストに送

られている。しかも、送られたのは今日。そして、彼女が彼の前から姿を消したのも、今日。それに、“だった”と過去形なのも気になる。これじゃまるで、死に行く者の意思——遺書のようなものじゃないか。

そう考えて、僕は教室を飛び出したのである。

僕を飛び出させた張本人、宝生は、最初こそ訳が分からないと言った表情で僕の後を走っていたのだが、僕の表情の変化と、走りながらも途切れ途切れに説明したさっきの考えにより、結果的に彼は僕よりも前に躍り出て、僕よりも必死に彼女を探す事となった。

「今の彼女はきっと、精神的に不安定だ。このままじゃ……ちよつと危ない。無事でいてくれればいいんだけど……」

比較的安全そうで、人が隠れられそうな場所から探していく。購買の裏、体育館倉庫、図書室、科学準備室……。だが、そのどこにも、彼女はいない。もしや……。嫌な予感がして、屋上に向かう。いつもは閉め切っている屋上だが、文化祭期間中だけは、荷物置き場として開放されているのだ。

そして案の定、彼女はそこにいた。

転落防止のフェンスに身を預け、ぼーっと街を眺めていた。

「伊紀！」

宝生が叫んだ。その声で彼女は――

「やあ、宝生か」

艶やかな笑みと共に、こちらを向いた。

*

道中、僕は彼にこんな事を聞いた。

「ねえ、宝生」

「なんだ？」

「答えたくないなら答えなくても構わないんだけど、お前、あのメルにいつ気が付いた？」

「……朝。起きた時に見た」

「それに、返信って、した？」

「……した」

「どんな風に？」

「……“俺も、だよ”って」

「そっか……」

宝生、そこはちゃんと言ってあげるべきだったんだよ。

きつと、彼女にとってそのメールは、賭けのようなものだったんだ。

もし、宝生がただの同意の文章だけではなく、ちゃんと自分の想いを伝えようとしてくれたなら――

その時は、もう一度信じよう、と。

だが、結果は案の定。きつと、それがいつも通りの反応だったのだろう。彼女は賭けに負けたのだ。

だから彼女は、“何か”を実行しようとしている。それが、彼の気を引く為ならまだしも、もし本当に追い詰められているのだとしたら……。

かなり、やばい。

そう思っ、僕はそれ以上何も言わず、搜索を続行する事にした。

だが、宝生の方は、少し納得がいかなかったらしい。道すがら、

僕は彼にこんな事を聞かれた。

「おい、お前どうしてそこまで……」

まあ、確かに、一介のクラスメイトである所の僕が、もしかしたら程度の、非常に低い確率の事でこんなに心配するというのは、彼にとっては不可解だったのだろう。僕も、あまり思い出さくはなかったのだが、ここまで深入りしてしまった負い目もあり、話す気になった。

過去の、負い目を。僕の、不甲斐無さを。

「僕は前に、好きだった人を亡くしたんだ。とてもとても、理不

尽な事で。彼女は僕の前から、姿を消した。……でも、今更ながらに思うんだ。どうして僕は、彼女に何も言えなかったんだろう、つて。彼女はきつと、僕が言うのを待っていてくれていたんじゃないのか、つて。だから、君達には、僕のようにはなつてほしくないんだ。

たった一つの言葉で、人は傷ついたり、救われたりする。だから、好きなら好きで、その気持ちを言つてあげてほしい。勿論、それで君の想いが全て伝わるとは思わないけど。それでも、安心するものなんだよ。実感するものなんだよ。

嗚呼、私はこの人に愛されてるんだな、つて」

「・・・そう、か」

彼もまた、僕の告白については、それ以上何も言わなかった。

*

僕の願いと、彼の祈りと、彼女の想いが錯綜する、屋上。

「おい、伊紀……」

「来ないで。来るなら、ここから落ちる」

『！？』

「なあ、何でこんな事……」

「もういい、もう嫌なんだ」

言葉とは裏腹に、いつもの彼女とは違い、何か物事を達観したような、人生を諦めたような、そんな表情をしている。心と表情があつていない、いや、まるで心に体が置いて行かれたような、あるいは、体と心がバラバラになつてしまったような、そんな風に僕には見えた。

僕には何となく、彼女の気持ちが分かるような気がした。

彼女、太谷伊紀はそれほど目立つ子ではない。どちらかと言うと、教室の隅で本を読んでいるような、大人しい物静かな子である。宝

生がいるから、休み時間なども楽しそうにしゃべってはいるが、一人の時はすごく大人しい性格である事を、僕は知っている。実際、普段は声も小さめで、授業中の発表なども積極的に行う方ではない。そんな彼女が、幼馴染とはいえ、サッカー部主将でもありスポーツ万能、容姿も整っていて、何より明るく人当たりの良い宝生と、中学の頃から付き合っているのだ。不安にも、なるだろう。

事実、彼らが付き合っている事を知らなかった、あるいは知っていても自分の方が魅力的だ、と考えた子達が彼に告白をする事は多々あった。彼はその度に、

「俺には伊紀がいるから」

と言って断っていたらしいが。それでも、彼女の方は気が気ではなかったのだろう。

僕も、付き合ってこそなかったとはいえ、花音が誰かから告白されるのを見る度に、何だかやきもきしていたのを覚えている。

つまりは、彼女は不安だったのだ。

“自分は本当に、彼に愛されているのか”と。

その結果……

「私は全てを捨てたの。“この娘”に全てを捨てさせた。私の意思はこの娘の意志」

「おい、伊紀。お前さっきから何言って……」

「私が捨てると言えば、この娘は何でも捨てる。そして私は、全てを捨てた」

にたあ、と普段の柔らかな優しい眼差しとは違った、嫌な笑みを浮かべる彼女。

どうやら、彼女の心はそのプレッシャーに耐えきれず、押しつぶされてしまったらしい。いや、一応呼びかけには答えているから、壊れかけている、と言うべきか……。歯車がずれた人形のように、けたけた、にやにや、と尚も笑い続ける彼女。

兎に角、完全に狂気に飲み込まれてしまう前に、何とかしなきゃ……。

そうやって僕が迷い、あたふたしている間にも、彼女の独白は続く。

「……私はもう、何も要らない。もう誰とも繋がりにたくない。関わりたくもない。ましてやこの私が誰かの為に何かをするなど……、虫唾が走る。馬鹿馬鹿しいにも程がある。誰かの事を想うなど、私にはおこがましい。この私が誰かに想われるなどという、勘違いはもう沢山だ。所詮、私は平々凡々な、一介の女子高生にすぎない。代わりなどいくらでもいる、世界の一欠片にも満たない、ひどく矮小な存在なのだ。

今まではそんな事に、気が付きもしなかった。だから、今のうとこの世界で生きていた。だが、それを悟った今となっては？　もう私にそんな価値など無いではないか。

だから私はもういい。もういいんだ。もう生きたくもない。死にたいとまでは思わんが、もう生きるのは嫌なんだ。だから……さようなら。今までありがとう。“この娘”を、愛してくれて」

「……待てよ」

それまで黙って、目を瞑って、彼女の告白をただ聞いていた宝生が、重い口を開いた。

「何？　止めたって無駄よ？」

「繋がりにたくないなら、どうしてお前は俺に礼を言っただ？　……」

「お前、本当はただ恐いだけじゃないのか？　俺に捨てられるのが……！？」

いきなり確信をつかれた太谷さんは、その衝撃で元に戻ったらしい。確かに、宝生の言葉にはそのぐらいの威力があった。ストレートにも程がある。……まあ、正気を失いかけていた彼女には、ちょうど良かったのかもしれないが。

いつもの細い柔らかい声で、彼女は本当の胸の内を話し始めた。

「だって、だって……怖かったんだもん。不安だったんだもん。知

景は私に何も言ってくれないし、何もしてくれない。朝迎えに行くのも私、学校で話しかけるのも私、帰りに待っているのも私、メールをするのも私からだし、電話だって……。それに、好きだって言ったのも私、付き合ってたって言ったのも私、デートに誘うのも私！手をつなぐのも、抱きしめるのも、キスするのも、いつもいつも全部全部私から！ 知景から私にしてくれた事なんて、一度もないじゃない！」

最後の方は、涙目になって、でも声を、自分の想いを伝えようと必死で、叫ぶようになっていた。

そんな感情的になってしまった彼女をなだめるように、さっきの辛辣な物言いとは裏腹に、きつくならないようにあえていつもより和やかに、でも真剣に、彼は言葉を紡ぐ。

「……じゃあ、伊紀。ちょっと聞くんが、俺がお前の誘いを一度でも断った事があるか？」

「！？」

「いつもお前の方が何だかんだ忙しいから、俺は気遣ってたただけだよ」

「え……？ じゃ、じゃあ学校で話しかけてくれないのは？」

「……すまん。それはその、恥ずかしいからだ」

「なっ……！？ じゃ、じゃあ、好きだって言ってくれないのは！？」

「……俺が一度でも、お前の事嫌いだって言ったかよ」

そう言って、彼は彼女に近づくと

「……好きに決まってるじゃねーか」

優しく彼女を抱きしめた。

「それにな、お前の代わりなんているはずないだろう？ 俺は、お前の、大谷伊紀の事を、どうしようもないくらい、愛しているんだから」

これにて一件落着。彼らは前よりも強い絆で結ばれましたとさ、

めでたしめでたし。

と言いたところだが、僕が思うに、彼らの絆はそんな言葉では語ってはいけないのだろう。自身の不安から己を追い詰め、その身を亡き者にしようとした一つの心。荒々しく舞う一つの魂を救うために、それを優しく包み込んだもう一方の心。じくじくと内側から突き刺されながら、それでも必死で彼女を離さなかった心。だからこそ、彼らの絆は一層深くなったのだろう。

まあ、これは僕が上っ面で騙っているだけだし、彼らからしてみれば、あるいは、他のクラスメートから見たら、ただの痴話喧嘩だったのかもしれないけれど。ただの恋愛のページだったのかもしれないけど。

少なくとも僕は、そう思った。そしてそれを、“羨ましい”と、心から思う。

そんな、一方で美しく、他方で荒々しくも見えたこの場面を見ていたのは、一人だけではだけではなかった。

「……ふーん。本当にやばくなったら助けてあげようと思ったのに。とんだ無駄足だったわ。さーて、余鈴もなつたし帰りますかね」
そしてそれは、足音もなく、その場から去っていった。

禁黙聖

その噂を最初に聞いたのは、入学式の時だった。

「なあ、参道。“クラウン”って知ってるか？」

「ううん。何それ？」

式典の真最中。一応、形式上静かにしていなければならない場ではあるが、高校となれば話は別。僕は運良く友人と隣同士になったので、小声で雑談していた。

「なんか、今ネットを騒がしてる戦略家らしいんだけどさ。なんでも、ヤーさんとながっているらしくって、何組かにまたがって自分の策を流してるとかいう、変な奴がいるらしいよ」

「ふーん。変なのがいるんだねー」

その時、それはその程度の、ただの噂話。

だからまさかこんな事になるなんて、僕は全く微塵も、予想してはいなかった。

——時は流れ、文化祭当日。事件の幕開けを告げたのは、一発の銃声だった。

バアアアアン

その音は一瞬、空を震わせたが、すぐに人の喧騒の中に消えていく。多分、皆何かのイベントだと思って、気にも留めなかったようだ。

それを聞いた時、僕は中庭にいた。自分の委員会の出し物の模擬店で、売り子をしていたのである。だが、それを聞いた瞬間、

「ごめん、ちよつと急用！」

僕は駆け出していた。

「ちよ、参道君！？」

「あんなに慌てて、何かあったのかしら……」

クラスメイトの声を背に、申し訳ないな、と思いつつも、それを無視して僕は走った。確証は無い。でも、何となく、嫌な予感がした。彼の、“クラウン”の身に、何かあったんじゃないかって。

＊

ネット上に突如現れた、謎の犯罪プランナー、通称“クラウン”。その正体が少し気になって、こちゃこちゃと、そしてかちゃかちやと調べてみた。でも、どんなに調べても、どんなに捜しても、見つかるのはその花々しい経歴と、数々の計略だけ。本人に関しては、影も形もつかめなかったのに。“クラウン”は案外、僕の身近にいた。

しかも、半分冗談で僕が、

「えー。そんな事言うお前がクラウンだったりしてな」と言うのと、

「ああ、そうだよ」

あっさり自分の事を認めやがったのである。

そう。何を隠そう、“クラウン”の情報を流した僕の友人、鈴笠^{すずかさ}来也^{らいや}こそ、ヤーさんや組の幹部とお知り合いの戦略家、黒いピエロ（clown）、“crown”だったのだ！彼は、普段は面倒くさがりだけど、自分の興味のある方向にだったらどんな犠牲でも払うという、何とも厄介な性格の持ち主だった。だから、噂を聞いた時から、もしかしたらとは思っただけ……。

いや、彼に言わせれば、彼のお気に入りの作家の作品から、キャラクターと名前をもらってきたらしいんだけど。そして、ネタもそこから拾ってきたモノだったりもしたらしい。

というか、その作家のブログに、

“いつかこんな人が本当にいたら、世の中面白くなりそうですね。”

と書かれていたのを真に受けて、ネット上で許可を取り、作家の夢

を叶えているつもり、らしい。鈴笠のあまりの陶醉具合に、僕が引いたのは言うまでもない。この辺の事情も鈴笠から聞いたんだけど、未だによく理解できていないしね……。

まあ、だから彼は厳密に言つと、“crown”というよりは“crown”という感じらしいのだけれど。でも、実際はそうはいかない。表立つて動いているのは鈴笠なので、ヤーさんに恨まれるのは彼なのだ。では、何故恨まれるのか。作家の立てた計画通りに行けば、物語上は完全犯罪が出来るのではないのか、それとも、それはただの机上の空論なのか、と言えばそうではない。それは、鈴笠と作家の良心がもたらした、当然の結果だった。

というのも、彼にも一応常識はあるので、数力所ではあるが、計画に穴を開けてあるのである。それが、鈴笠が作家からネタを借りる時の条件だった。“自分の冗談半分の計画で、犯罪者が増えてしまつては、元も子もないから”と。だから、ほとんどの場合は、その計画を実行すると、失敗するように出来ている。そもそも、彼がクラウンになった目的が、そういう計画に乗ってやってくる悪党共を、あわよくばお縄にかけよう、という若干正義感のあるものだったりしたのである。だが……。ごく稀に、ものすごい強運の持ち主、あるいは度重なる偶然に守られて、計画を完遂しちゃう人がいるのだ。だからクラウンは評判が評判を呼んでしまつて、その一部の人達に紙的存在として、若干あがめられている。だからこそ、その評判が高まれば高まるほど、失敗した時の裏切られた感も一層高まる。だから、気をつけていたのに。

彼が狙われないように。

「はあ、はあ……。どこだ、鈴笠……」

彼の居そうな所は粗方回った。クラス展示の教室、体育館、武道室、そして――

「ここが最後か……」

彼の所属する化学部の展示会場。特別教室棟三階、化学実験室。

人でごった返していた教室棟とは違い、閑散とした人気のない場所。そこに

「大人しくしろお！」

拳銃を持った黒服の二人組の男と、

「止めて下さいいいいいいい！」

必死の抵抗を試みる鈴笠がいた。

彼は男達に拳銃を突きつけられ、部屋の隅の方にまで追いつめられていた。

——やばい！ とりあえずあいつらをどうにかしないと。でも……丸腰は辛いな……。そうだ。ここにある薬品を使えば、何とか……。えーっと、ダイナマイトってどうやって作るんだっけか。ああ、もう、塩酸とかでもいいか！ と、兎に角、行かなくちゃ。

友人のピンチに、考えがあまりまとまらないまま中に入ろうとしたら、

「貴方には荷が重いわ」

ガシッと肩を掴まれた。

「ここは、私に任せて」

「あ、貴方は……」

呆然とする僕をよそに、悠然と中に入っていく白衣の女性。胸には変わったデザインのブローチ。嗚呼、成程。やはり、この人が……バアンツ

わざと派手な音を立てて目立つ登場をした女性。いや、見た目的には少女と形容しても良いんだろうけど、一応先輩なので敬意をこめて、女性とする。

「あ？ 誰だてめえ？」

「……この廣野姫幸と申します。ところで……あんだ達、あたしの城で何やってくれてんの？」

にこつ、と無邪気に笑う顔と、その割に眼光鋭い眼差し。鈴の鳴るような愛らしい声と、威圧的な台詞、という、絶対的に合わない事を一人でやってのけて、化学部書記、廣野先輩は君臨した。

廣野姫幸。三年生。化学部書記兼文芸部副部長。そして、僕の所属する美化委員会委員長でもある。どこに行っても、それなりに高い地位に押し上げてられてしまう。それが姫幸先輩だった。そして今は――

「てめえ、可愛い顔して言うじゃねえか……。女だからって手加減しねえぞ！」

「あら、威勢の良いコト」

二人組の男、しかも拳銃を持ったヤーさんに、丸腰で対峙していた。「その減らず口、すぐに聞けなくしてやる！」

おりゃー、と二人がかりで向かっていく彼ら。あーあ。可哀相に彼らが殴りかかったその瞬間、姫幸先輩の姿が見えなくなった。と思ったら、

『ぐわお！』

妙な声がして、ヤンキー二人組がぶっ倒れた。その真中に、姫幸先輩は立っている。

「本当、相手の力量も測れないなんて……。しかも、か弱い女子高校生のパンチごときでのされちゃうなんて……。弱いにも程があるわ」

どうやら、その小柄な体格を生かし、早業で鳩尾にでも一撃くらわしたのだろう。しかも、二人が同時に倒れたところを見ると、両手で。ああ、そういえば、姫幸先輩は両利きだったんだっけか……。

そして、腰を抜かしている鈴笠に近づくと、

「大丈夫？ 来也君」

すっと手を差し出した。

「は、はい。……先輩、お強いんですね」

「ふふふ、まーねえ」

その異様な光景に啞然としつつも、ふむ、確かに僕が割って入ってもきつと、助けになるどころか、逆に鈴笠と一緒に追い詰められて終わりだっただろうな、などと頭の隅で思った。多分、当面の危

機が回避された事により、少し冷静になれたからだろう。

さて、これならもう入っても大丈夫かな、と一步を踏み出そうとしたら、

「くそ……っ」

考えにふけっている間に、ヤーさん二人組は立ちあがれるようになってしまった。僕は再び、入るチャンスを失う。

そして彼らは、突然現れたやけに強い、自称女子高校生に不満たらたら、まだダメージの残る体で、よろよろとしながら鬱憤をぶちまける。

「なんで……」

「あれ？ 君達知らないのお？ “クラウン” って、聞いた事ない？ 確か、無駄にそっちで有名になってたはずなんだけど」

「！ 聞いたことあるに決まってるだろ！？ 俺達はそいつの計画に乗って失敗しちゃったんだ！」

「だからこうして復讐しに来たんだよ！ こいつにな！」

鈴笠を睨むヤーさん達。すると

「あはははははははははは！」

姫幸先輩はさもおかしそうに笑い始めた。

「何がおかしい！？」

「だってさあー。そもそも、人から計画もらってくる方がおかしいのよ。それに、犯罪犯そうとするんだったら、ある程度のリスクは覚悟しないとねえ。この子に責任押し付けるなんて、筋違いにも程があるわー」

「筋ってんなら、そいつが立てた計画で失敗したんだ。責任とるのがそれこそ筋じゃねーのか！？」

「だーかーらー、それがそもそもおかしいんだってばあ」

「あ……？」

「あ、あんた達もしかして目悪いのお？ これ、見えない？」

姫幸先輩が示した物は、自分の胸にきらめくブローチ。それは、真黒い王冠をかぶったピエロを象った物だった。

「ま、まさか……」

「そう。あたしが本家本元。“crown”の原作者。泣かない道化師、王になりたがった愚かなピエロ、さ」

「そんな……」

「廣野先輩が、ひろやひかり広矢光さん、なんですか？」

「うん、そうだよ。って、アレ？ 知らなかったの？」

「はい……」

やっぱり……そうだと思った。ってか、皆、気が付こうよ。ちなみに、あのブローチはファンからの贈り物だそうだよ。先輩って、どれだけファンに愛されてるんだろうね。

「お、お前がクラウンかよ！」

「さ、さっきは遅れを取ったが、もう容赦しねえぞ！」

彼らがすぐるように懷から取り出したのは、バタフライナイフとスタンガン。あー。ついに武器出エモしちゃったよ。あの人達、生きて帰れるかな？

「ふふふふ」

あ、やばい。先輩笑ってる。廣野先輩は、口元には微笑みを絶やさずに、しかし、眼光は益々鋭くとがらせて、続ける。

「そんなもん出してくるって事はよお、お前達、死んでも良いって事だよな……？」

うわ、これまずいって。あの二人、本当に……

「あゝ？ ふざけた事言ってるじゃねーぞ、おらあ！」

「……カッターと、金鎚と、柄つき針と、薬さじ。どれがいい？」

「は？ 何言ってるんだてめえ」

「使用方法は順に、斬る、叩く、刺す、抉る」

ゾクゾクゾクツ！ ヤーさんの体が震える。嗚呼、やっと分かったんだね。姫幸先輩の恐ろしさが。でももう遅いよ。止めなきやいけないのは分かっているんだけど、でも、僕じゃ先輩に勝てないしな。どうしよう……。おろおろしている僕の肩に、ポンっと手を置く人が現れた。それは、幸か不幸か。グラサンでオールバックな真

っ黒スーツの人だった。

「坊主、大丈夫だ。後は俺に任せろ」

低い良い声でそう言つと、奇しくも姫幸先輩と同じく、ドアをバ
アンと鳴らして中に入つていった。

「おい、てめえら！」

『！？ 兄貴！？』

「てめえら……俺の女に何してんだ！」

『えー！！』

ちょ、先輩の交友関係つて？！ なんでこんな人とまで知り合い
なの！？ つていうか俺の女！？ つて事は……。

「え？ じゃこの女……いや、このお方は」

「俺の彼女」では、ありまーせんっ

つて、えー！

「そんな冷たい事言つなよお、姫幸」

「黙れ。友達やめるぞ」

「あ、ああ、ごめん、姫幸！ 冗談、冗談だから！ そんな事言わ
ないでえ」

「分かれば宜しい」

……先輩すげー。あの強面のグラサンの人が、いとも簡単にあし
らわれている。というか、先輩の方が立場上なの……？

「おら、兎に角帰るぞ」

『は、はい』

「悪かつたな。迷惑かけて」

「いや、良い」

「じゃ、またな」

兄貴と呼ばれた、自称廣野先輩の彼氏のグラサンの人と、噛ませ
犬的扱いになつてしまったヤーさん二人組は、こうして帰つていっ
た。

「あのお」

入るタイミングを完全に失い続けていた僕は、ここぞとばかりに入れ違いで入っていく。

「ああ、潤ちゃん！」

ガバア

「今日も可愛いねー。あー、お持ち帰りしたい！」

「い、痛いです。姫幸先輩」

最近廣野先輩のマイブームが、僕を見かけては抱きつく事、らしく今日もその例にもれず、いきなり飛びつかれた。ちなみに、先輩も背は低いが僕もかなり小さい方である。だから、毎回首の辺りがぐえってなつて、大変なのだ。

「あ、ごめんごめん。それより、さ。見てた？」

「まあ、はい。あの後もずっと居たんで……。一部始終？」

「そっかあ。ま、仕方ないか」

「格好良かったですよ、先輩」

「え？ 嘘。潤ちゃんにそう言われるとテレちゃうなー。え？ 何？ 惚れちゃった？ 潤ちゃんあたしに惚れた？」

「あはははは」

「あのお！」

『？』

嗚呼、そうだ。彼の存在を忘れていた。一応、今回の一番の被害者でもあり、主役でもあるはずの鈴笠は、僕の登場によって完全に置いてけぼりにされた穴を埋めるため、声を張り上げて言う。

「えと、いくつか質問良いですか？」

「どーぞ」

「い、今の人は？」

「昔の友達」

「参道とは、前から知り合いだったんですか？」

「うん」

「委員会が一緒なんだ」

「嗚呼、成程」

「んー、まあ、あれだ」

『？』

意味ありげに、そしてこれでもう説明は終わりだ、と言わんばかりに、姫幸先輩がしめた。

「若気の至り、って奴で、ね？」

『・・・』

その笑顔で、僕達は全てを忘れる事にした。

そして、僕はクラスの皆に心からの土下座をして、ついでに姫幸先輩からも説明していただいて、その後は普通に文化祭を満喫した。僕達の文化祭は大成功、皆思い思いに楽しめたようである。ただ一人、

「廣野先輩、いえ、広矢光さん！　ずっとファンでした！　好きです！　付き合つて下さい！」

「ごめーん。あたし今、潤ちゃんに夢中だから」

と、かるーい感じでフラれた、あわれなクラウンを除いては。

奇苦

この半年間、いろんな事があった。高校に入学してから、本当に毎日毎日騒がしいほどに、目まぐるしく日常が過ぎ去っていく。大切な事さえ、忘れてしまいうぐらいに。

「……そういえば、最近リュウさんの姿を見ていないな。何かあったのかな？」

それは、予感。何となく、胸騒ぎがした。彼の身に何かが起こったんじゃないか、って。

そして、僕はそれが当たっていた事を後に、知る事となる。

*

月明かりまぶしい、雲一つない夜。

時は満ちた、とばかりに俺は家を出た。誰にも気付かれず、何にも悟られないよう、忍び足で。

思えば、今年の春“怪盗セゾン”が久々に姿を現してから、俺はずっと真帆さんや潤にも隠れて、奴について調べていた。今日という日の為に。

*

最初におかしい、と思ったのは、奴が潤の策にまんまとひっかかった事である。いや、確かにあれは相手の意表をつく良い作戦だった、それは間違いない。だから、負け惜しみなどでは決してない。しかし……。もし虎季たけゆきなら、そんなもの一目で見抜き、本物を苦もなく盗みだしたはずだ。それぐらい、彼の目は優れている。それに、薄れゆく記憶の中で見た、あの人影……。

まあ、それに気付いていたのは、俺ぐらいのものだろうけど。警

察の方や真帆さんなんかは、わざわざ予告状を送りつけ、運を味方につけた神業的な盗み方だけに、目を奪われているから。でも、セゾンの、虎季のやり方はそうではない。いや、それだけではない、というべきか。

彼がどうして、悪いイメージがつきまとう“怪盗”という名を掲げていても、新聞でとりあげられるくらい皆に愛されているのか。そして、憎むべき立場であるはずの俺が、ある種の敬意を抱いているのか、と言えば、その美学による所が大きい。

彼は闇ルートの美術品や、政治家の汚い金だけを標的とし、その手口はまさに圧巻。今まで一度だけ、好敵手を助ける為に自分から牢に入った事はあったものの、それ以外は逮捕されず、というか姿も見せず、被害は必要最小限。殺しもせず、人を無闇に傷付ける事もなかった。だから怪盗セゾンは、虎季の時に一躍、スターの座を射止めたのである。

だがしかし、どんなに崇高な理想を掲げていても、盗みは盗み、犯罪には変わらない。彼が犯罪者である事に、変わりはないのだ。

*

気持ち焦っているからだろうか。考えがまとまらないうちに、問題の建物に着いてしまった。そこは、昔虎季が盗みに入った事で倒産した宝石商の跡地、というか栄華を極めた後、廃墟になってしまったビルである。

正面から入るのは流石に気がひけたので、勝手に中に入らないように、申し訳程度に囲われた裏口から入る事にした。所々ひしゃげた古いフェンスをひよい、と跳び越え、錆付いた外付けの階段を上がる。多分、彼がいるとしたら屋上だ。

カッン、カッン、カッン。

実は俺自身、まだどうしたら良いのか、よく分かっていなかった。根拠は言わずもがな、確証もある。けれども、否定されてしまえば

それは絵空事。ただの妄想と化してしまう。しかし、探偵として、真実を闇に葬り去る事だけはしたくなかった。それに、あの人の事だから、間違っていないければ、どういう形であれ認めてくれるだろう。そういう人だ。それより心配なのは、果たして彼がまだ来ているかどうかである。少なくとも三年前、忽然と姿を消すまでは、来ていたはずなのだが……。まあいい。職業柄、空振りには慣れている。いなかったら、また別の可能性をつぶしに行けば良い。

“探偵とは、そういうものさ”

昔、そう教わった事を思い出す。

気持ちを切り替えた所で、目的地である最上階に着いた。そして、今までの葛藤や杞憂をあざ笑うかのように、彼はいた。

「よお、虎季」

俺は後ろから、声をかける。懂れてやまなかった、その背中に。

「龍貴か。久しぶりだね。あの時以来だから……。もう三年になるかな？　少しは成長したみたいだね。ふふ、そろそろ来るんじゃないかと思っていたよ」

よっこらせ、と緩慢な動作で立ち上がると、やっと俺と向かい合う形になった。久々に見た彼は少し髪が伸びているようで、地毛にしては明るすぎる茶髪を赤いゴムでくくっている。しかしそれ以外は、俺の知るそのままのようだ。

「待っていたにしては、随分と注意散漫なんだな。普通、誰か近づいてきたら後ろぐらい振り向くだろう？」

「いやいや、これでも歓迎しているんだよ？　それに、お前以外来ないと思ったからこそ、僕はこうしてのんびりしていたんじゃないか。いわば、信頼の証だよ」

相変わらずの減らず口と、マイペースさに、俺は思わず苦笑した。だが、笑ってばかりもいられない。

「ちよっと、お前に聞きたい事があってな」

「ほう、そうかいそうかい。僕に聞きたい事か。昔とは言え、可愛

い後輩の為だからね。何でも答えてあげるよ。でもね」

そこで、目の色が変わった。いや、目から光が消えた、というベキだろう。いずれにせよ、優男の風貌は一転し、獲物を狙うハンターのようになった。この眼を最初に見たのも、やはり三年前だったか。

「その前に、君がどれほど強くなったのか、見たいなあ……？」

言い方こそ違えど、こういう態度は昔とちつとも変わらない。他人の成長具合を見て適切なアドバイスをし、才能を伸ばす、という点においては誰よりも上手かった。何より、彼自身がそれを楽しんでいる節があった。もつとも、今となつては、それが演技だったのかまでは、定かではないけれど。

「ほら、やっぱり先輩としては、後輩の成長よりも喜ばしい事はないからね」

にたあ、と一見すると人懐っこい笑みを浮かべる虎季。

しかし、その笑顔の裏に隠された彼の強さは、俺が一番よく知っている。その恐ろしさも、狡猾さも。それでも。

「……決着をつけようぜ、虎季、先輩」

真っ向から、正々堂々ぶつかっていく。俺にはそれしか、思いつかなかった。己の正しさを証明し、彼に認めてもらう為にも。

例えそれがかつての仲間でも、今の宿敵に変わりはないのだから。

*

先程の会話からも分かる通り、虎季は俺の先輩だった。学校の、ではない。探偵の、だ。

そう、何を隠そう、虎季は探偵だった。しかも、あの安楽椅子探偵、真帆さんに認められた、優秀な探偵だったのである。彼は、俺が事務所に入った頃にはすでに第一線で活躍し、そこそこ名も知られていた。

だからあの時は、まさか彼が、世間を賑わせている怪盗一族焰家

の末裔にして、歴代で最も美しく、最も民衆に慕われた、七代目“セゾン”だとは知らなかった。知らずに懐き、慕っていた。もつとも、俺が虎季に惹かれたのは、彼がセゾンだったから、かもしれないけれど。

そう、その時点で本来は気付くべきだったのだ。だがしかし、俺にそう思わせなかったのは、彼が、また俺がいた場所が、他ならぬ真帆さん——人の心を見抜く事に関しては右にでる者はいない名探偵——の事務所だったからである。彼女が認めた人間が、そんな犯罪者であるはずがない。誰だってそう思う。だから俺は、彼から多くの事を学び、自分で言うのもなんだが、どんどん成長していった。虎季でなければきっと、俺はここまで高みに登れはしなかっただろう。

だが、一人前になり、本格的にセゾンについて調べられるようになったからしばらくして、俺はセゾンの正体を知る事となる。いや、この場合は俺に“知らせた”と言った方が適切か。先にも述べたように、唯一の好敵手を助け出す為だけに、彼は捕まる事を選んだ。しかも、俺に捕まる事を。そして、虎季が俺に捕まえさせた場所こそが、ここだった、という訳である。

*

「はあ、はあ、はあ……。くそつ。何で当たんねえんだよ……」

先につつこんでいったのは俺だったが、優勢なのは虎季だった。リーチの差でもない、互いに武器を持っている訳でもない。というより、彼の方からは一発も仕掛けてすら来ない。それでも、俺の渾身の攻撃は、全てあっさりとかわされた。これだけ華麗に避けられると、こちらの気分まで萎えてくる。

「そりゃあ、お前。くぐつてきた修羅場の数が違うからなあ。むしろ、僕とお前が互角だったら、そっちの方が恐ろしいわ」

虎季は微笑みをたたえながら、風のように柳のように、ゆらりふ

らり、のらりくらり、と決して遅くはないスピードで放たれる連続蹴りを、全て受け流す。

「まあ、昔よりは強くなったかね。お前、昔は酷かったからなあ。闘志が無い、というか、相手を傷付けたくないんだか、そこら辺はよく分からなかったけど。まあ、それがお前の良い所でもあった訳だが。しかしだ。今日のお前は一味違うな。僕を殴ってやろう、倒してやろう、超えてやろう！ って意志が、よく伝わってくるよ。一体何があったんだかね。でも、それでこそ我が愛弟子だ。

そう、人間誰にでも、やらなければならない時がある。自分の信念を貫き通さなければいけない時がある。そんな時には、プライドなんてかなぐり捨てて、ただ己の信じた方に進めばいいのさ。それが、世間一般に言う、悪の道だとしても、ね」

相変わらずよく回る口だ。これで俺の攻撃を避け続けているのが、不思議で仕方が無い。

「でも、僕とやるにはもう少し、経験を積んできた方が良かったかな。毎年この日に、ここに来ている事ぐらい、お前なら知っていただろうに。

……嗚呼、そうか。さっき聞きたい事がある、と言っていたね。やっぱり、勘づくとしたらお前だとは思ったが……。まあ、まだ内容を聞いていないから、何とも言えないんだけどね。うーん、参ったなあ。

でもまあ、仕方ないよね。若い芽をつぶすのは忍びないけど、ここで鼻っ柱折つとかないと、ややこしい事になりかねないから、っと！

わざと派手にローキックをおみまいする。案の定、当たりはしなかったものの、一旦距離をとり、尚且つ黙らせる事には成功した。流石に、日々鍛錬しているとはいえ、これだけ当たらないとなれば、気力も体力も殺される。ちょうど、さっき聞き捨てならない言葉があったので、反論しておく必要もあった。

「おいおい、もう終わりか？」

虎季お得意の茶化しも、今は耳に入らない。

「……今日の俺には意志がある、って言ったよな？　その理由、教えてやるよ」

「ほう。……良い目に、なったな」

俺の雰囲気が変わった事を感じ取ったのだろう。また少し、目に力が宿った。だがそれは、今から俺が言う事を予期していたのだろうか。何となく、身構えたようにも見えた。しかし俺は、そんな事を気にも留めず、ただ怒りに任せて想いをぶつける。それが、自分の首を絞める事になるとも知らずに。

「お前、何故、真帆さんを裏切った！」

そう。俺自身は別に、彼が怪盗である事に関しては、何とも思っていない。セゾンに対する見方が違うからだ。むしろ、元々尊敬していた相手に直々に指導してもらって、嬉しいくらいである。そんな事、口が裂けても言えやしないけれど。

だが、真帆さんは違う。彼女が虎季の正体を知っていたのか否かは、俺にも分からない。そのくらい、知らぬ存ぜぬ気にせず、いつも通りにふるまっていた。だが、仮にも俺は、真帆さんの弟子だ。悲しんでいる事くらい、自分を責めている事くらいは分かる。それに、あの一件以来、成田探偵事務所の評判が落ちたのもまた、事実だった。まあ、自分の弟子から犯罪者を出したのだから、当然と言えば当然か。しかし、俺はどこかで、虎季ならそんな事をしないと信じていた。だから、そこだけが心残りで、悔しかったのである。

俺がここに来たもう一つの目的は、それだった。

「……裏切った、だと……？」

彼の地雷を踏んだらしい。より一層、目が鋭くなった。しかし、それに怯む事なく俺は続ける。

「ああ、そうだよ！　お前、あの後真帆さんがどうなったと思う！　それぐらい分かるだろ？　俺はお前を尊敬していたのに、何で、

何で！ あんなに慕っていた真帆さんの事を裏切った！」

感情に任せ過ぎて、俺は自分でも何を言っているのか、よく分らなかった。でも、俺の想いは、しっかり虎季に届いてしまったらしい。

「お前に何が分かる！ お前に、お前に……。俺の何が分かるって言うんだああああ！」

それから、怒濤の猛反撃が始まった。否、反撃というにはあまりにも手ぬるい。それは、なぶり殺しにも近いような、圧倒的な暴力だった。体力の消耗もあっただろうが、それ以上に虎季はすさまじく強く、今まではかなり手加減してくれた事を体感する。俺は避けるどころか、軌道を変える事すらままならず、ただ急所を守りながらじつと、受け続けた。自分の弱さが招いた、制裁を。

途中、ぽたつと何かが俺の顔に落ちた。が、その頃にはもう視界は怪しく、それが何なのかは分からなかった。……多分、虎季は泣いていたのだろう。そう気が付いたのは、少し後の事。

「……ファイナーレ、というのか」

機械的なまでに俺を打ちのめした後、絞り出すように、彼は言った。もはや痛みすら、麻痺して感じなくなっていた。そんな俺の目に映っていたのは、楽しかった頃の、仲が良かった頃の、虎季との思い出。

——どうして、こんな事になっちまったのかな。

俺はただ、虎季に謝ってほしかった。自分が何をしたのか、誰を傷付けたのか。それを認めてほしかった、それだけなのに。きつと虎季にも自覚はあったのだろう。今まで悩み続けていたのだろう。だからこそ俺の言葉は、無神経に響いてしまったのだ。

ざつ、と踏み込む音が聞こえる。本当に、最後の一発を喰らわすようだ。

——嗚呼、ここで死ぬのか。

その時だった。

バアンツ

「そこまでよ」

二重にかけた南京錠——おそらくは虎季が、誰も入って来られないように、とかけたものである——を、いとも簡単にぶち破り、扉が壊れるほどの大きな音を立てて、一人の女性が派手に登場した。

「真帆、さん……」

何を隠そう、成田探偵事務所所長、成田真帆さんその人だった。

「真帆姉……」

流石の虎季も、彼女の登場は予想できなかったようだ。

「ど、どうして……」

「私を誰だと思っているの？ 仮にも、安楽椅子探偵よ？ 弟子の拳動一つ疑ってかからないで、何が探偵だと言うのかしら」

やはり、流石に彼女の目は誤魔化せなかったらしい。全てはお見通し、という訳か。それにしても時間がかったのはおそらく、正面から堂々と入ってきたからだだろう。あちこち鍵がかかっていたであろう建物内を、どう進んできたのかは……、考えない事にしよう。真帆さんは、すんでのところで止められた虎季の足と、ぼろぼろになっている俺を一瞥してから、間に割って入った。俺を、かばうようにして。

「虎季、これ以上やるって言うなら、私が相手になるわ」

そして、いつもの温和な、柔らかい眼差しからは想像もつかない、鋭くとがった刃のような眼で、彼を睨む。

「……身内に甘い所も、相変わらずだね」

予期せぬ事態に、彼の心は多少落ち着きを取り戻したのだろう。少しだけ、目から邪気がとれた。

「そうね。だからこそ、落とし前は自分で着ける」

流石の真帆さんでも、俺が一方的に嬲られている所しか見ていなければ、まあ勘違いするのも無理はないだろう。だがしかし、俺達

にそんな気はなかった。少し、齒車が狂っただけ。だから、一旦止まってしまえば、もうそれで終わり。当初の約束を、ようやく思い出す時が来たのである。

「おお、恐い恐い。折角の美人が台無しだよ？」

……まあ、もう僕に龍貴を痛めつける気はないからね。大人しく退散させてもらうよ。さて、龍貴。お前の意識が怪しくなる前に、聞きたかった事、とやらを聞こうか？」

「いや、もういいよ……。お前じゃない事ははっきりしたから」

そう、俺の目的は、最初に手合わせした——つまりは、俺を傷付けないようにふるまっていた——時にはもう、すでに達成されていた。

彼は、俺の知る虎季のままだった。ならばもう、疑いの余地はない。

「今世間を騒がせている奴、あれ、お前じゃないんだろ？」

「なん、ですって……？」

驚く真帆さん。それもそのはず。この事は誰にも言ってはいなかったのだから。

「ほう、気が付いたのか。というか……何か掴んだのかな。

いずれにせよ、だからこそ、僕達の出る幕はもうないのさ。後は、若い世代に、つてね」

じゃ、そういう事で。

今まで風なんか吹いていやしなかったのに、彼がそう言い放つと同時に、煌々と照らしていた月を雲が覆う。その一瞬の闇に乗じて、虎季は姿を消した。音も無く、気配も残さず。

それが唯一、怪盗らしい所だった。

追いかけても無駄な事を悟ったのか、真帆さんはその場を動こうとはしなかった。

「たっちゃん、今のつてどういう……」

その代わり、先程の俺の発言を追求しようとした。が。流石に、

少しやられ過ぎたらしい。奴が消えると同時に、俺は意識を失っていく。呼びかける真帆さんの声が遠くなっていくのを実感しながら、俺は半年前の事を思い出していた。催眠ガスで薄れゆく視界の中で見た、あの人影を。長い黒髪を。見間違いかと思ったが、彼の口ぶりがそれを裏付けた。

つまり……。

今回の収穫としての結論を胸に抱いて、俺はしばしの眠りに着いた。

——セゾンは、潤の近くにいる。

奇苦（後書き）

ようやく、佳境に入って参りました。
残すところ本編もあと4話です。
どうぞ、宜しく願います。

篝火草

僕がそのメールを受け取ったのは、放課後。

——話がある。大事な事だ。今日、事務所で待ってる。 龍貴

「はい、用が済んだらすぐ行きます」っと

大事な話ってなんだろう。そう思いつつ、さっさと終わらせて向
かおう、とペンを握り直す。

「なーにやってんのー？」

「うわぁ！」

すると、送信ボタンを押すと同時に、後ろから声を掛けられた。
それまで自分の世界に浸っていたので、僕は派手に声を上げる。不
覚。ぐるっ、と振り向いて声の主を見ると、最もこんな悪戯をしそ
うな奴で、何となく我点がいった。

「なんだ、穂村かー。吃驚したー」

「なんだとは何よー。それに、何で私だって言い切れるのよ。伊紀
かもしれないじゃない」

『ええええええええ』

おそらくは宝生を待っていたのであろう、太谷さんも、いきなり
自分の名前が出て驚いたらしい。今まで読んでいた本を閉じて、穂
村へ抗議しに来る。

「なおちゃん……。私、ただ本を読んでいただけなんだけど……？」

「そうやって人を巻き込むのは止めようねー、穂村」

「ま、まあ良いじゃん。それより、伊紀も気にならない？ 出席簿」

——ああ、成程。それで穂村はわざわざ話しかけに来たのか。

僕の学校では担任の負担を減らす為か、それともークラス当たり
の人数が多くて役職を増やすためのかは知らないけれど、何故か
出席簿をまとめるのは生徒の役目になっている。先生が毎日遅刻・
欠席・早退をつけている、アレの事だ。それを一か月ごとにまとめ
て、出席率を出す、という仕事を僕はしていたのである。

「あれ……？ 何で参道君がそれやってるの？ それ、書記の仕事だよな？」

流石、太谷さんは細かい事によく気が付く。

「委員長に頼まれたんだよ。今日会議があるらしくってね」

ちなみに、委員長は書記ではないのだが、我が担任は何かあると委員長に頼むので、実質、彼女が書記も兼ねている。だから皆、委員長に何でも頼っちゃうんだろうなあ。彼女がそれだけの能力を持っている、という事でもあるのだけれども。

「成程ねー。きっと、また無茶ぶりされたんだろうなあ……」

「あはははは」

全くもってその通り。僕も気になったので、委員長に理由を尋ねてみたら、
“いや、先生が〆切を忘れていたみたいだね。HR終わった後、急に言われたの……。しかも今日中に……”と、いかにもうちの担任がしそうな事を、言いづらそうに話してくれた。うん、先生、それは無理だよ。

「ふーん。で、勿論私は遅刻なしよね？」

穂村は、別にそこには興味が無かったらしく、代わりに自分の出席状況を聞いてきた。まあ、委員長がやっている時もよく聞いている人がいたから、やっぱり気になる物のようだ。そんなもの、遅刻も欠席もしなければ、覚えられるだろうに。

「あー、遅刻はなかったかな？ でも、欠席は何回があったよ。月に一回は必ず休むよね、穂村って」

「うっさいなー。自主的に休むようにしてるのよ」

「何その理由」

あまりにも穂村らしくて、思わず苦笑する。僕につられて、太谷さんも笑う。

「な、笑う事ないでしょ！？」

「少しは皆を見習いなよ。太谷さん、委員長、僕、鈴笠、宝生、皆今んとこ皆勤だよー？」

僕は彼女にも見えるように、出席簿を広げる。

「本当だ……。って、あれー？ 遠足の次の日って、このは、遅刻しなかったっけー？」

「そういえば……」

さつきつから熱心にのぞいていたと思ったら、まさか人のあらさがしをしていたとは……。半ばあきれつつ、僕もつられて“絵桐時葉”と書かれた欄を見る。ふむ、確かにこの日は遅刻していた気がする。委員長が遅刻するのは珍しい、というかこの日だけだったから、記憶に残っているのだ。

「ああ、あの日はね、僕が遅れたからよしって事にしたんだよ」

『！ 先生！』

我が担任は、存在感が薄いのか、それとも忍び足で歩いているかなのかは知らないが、毎回こうやって突然現れる。本当、この人は謎な部分が多すぎる……。

「いやー、そろそろ終わったかなー、と思っただけ」

「あと出席率だけ出したら終わりです」

「うむ、流石参道。仕事が早いねー。助かった」

カタカタカタ、と文明の利器、電卓様のお力をお借りして、公式に添って計算を行う。出てきた結果を所定の欄に書いて、僕は先生にそれを渡す。

「さんきゅーさんきゅー。んじゃ参道、お疲れさん」

「あー、やっと終わったー」

言葉通り、これだけのために来たらしく、そのまま立ち去ろうとする我が担任。しかし、教室から出る間際、思い出したように此方を振り向いた。

「あ、それと穂村。小林先生が呼んでたぞ」

「えー。……ああ、そっか。生徒指導か。説明するの面倒くさいな

ー」

「ま、伝言は以上だ。そんじゃ」

「うー。まあいっか。行つてこよう……」

とぼとぼと体育教官室へ向かう穂村。入れ違いに、宝生が顔を出

す。

「悪い、伊紀。待たせた」

「うつん！ 待ってないよー。それじゃ、参道君、また明日」

「じゃなー」

「二人とも、バイバイ」

――ふう、僕も仕事終わったし、帰るか。

仲睦まじそうな後姿を見送りながらのんびり立ち上がると、不意に太谷さんが此方を向いて言った。

「って、あれ？ 参道君、今日何か予定があるんじゃないの？」

「！ そういえば。ありがと、太谷さん！」

なんやかんやですっかり約束を忘れていた僕は、急いで教室を後にした。

*

そんな訳で、僕が成田探偵事務所に着いた頃には、もう日が暮れていた。ドアがいつも開きっぱなしになっているのは知っていたので、ノックだけしてそのまま入る。

「こんにちはー、って、リュウさんその怪我どうしたんですか！？」
玄関近くのソファに、包帯男のようになっているリュウさんが腰かけていた。もしかして、何か事件にでも巻き込まれたのだろうか？
そこで犯人ともみ合って……。

「いやー、どつから話していいもんだかなー」

「とりあえず座って座って。落ち着いてから始めましょう」

こうやって余計な心配をする事を、予め予想していたのであるうか。裏手から真帆さんが出てきた。僕が来るのを見越してか、お茶の用意を手に持って。

鞆を置き、お茶を一すすりしたところで、リュウさんは本題に入った。

「実はな、怪盗セゾンと対決してきたんだ」

「!？」

あまりの事で、僕は危うく吹き出しそうになる。

「え!？　ちょ、何で……」

「前にも言っただろ？　虎季とは因縁がある、って。そこら辺もこれから説明するが、とりあえず先に聞いて欲しい事がある」

「実はね、そのとらちゃ……虎季は、今事件を起こしているのは自分じゃないって言うのよ。それで、たっちゃんも何故かそれに納得してるのよ」

「え？　セゾン＝虎季っていう人なんじゃないんですか？」

僕はてつきり、リュウさんや真帆さんの話ぶりから、そう思い込んでいたのだが。

「いや、それは一応成り立たない。怪盗つつうのは、何故か世襲制でな。虎季は確か、七代目だったはずだ」

「そうなんですか……」

しかし、事実とは違ったようだ。僕は改めて、自分が何も知らない事を実感する。

でも、だからこそ、僕は聞いておかねばならない、そんな気がする。そして、二人もそれを望んでいるような気さえした。

「でも、それだけでは虎季さんをセゾンではないとする証拠にはありませんよね？」

「うーん、根拠はいくつかあるんだが……。そうだな、その前に色々、喋らなきゃいけない事がある。お前や、それから真帆さんも知らない、虎季の、セゾンの事についてだ」

そう言っ、リュウさんは、自分の知っているセゾンの事を一つ一つ、丁寧に話し始める。虎季さんは昔この事務所で、一緒に仕事をしていた事。彼が優秀な探偵だった事。今までのセゾンの手口。リュウさんが彼を捕まえた経緯……。

それは、何だか懐かしさに満ちていて、リュウさんの虎季って人に対する好意的な感情を感じた。

「とりあえず、こんな所です。今んとこで、何か質問ありますか？」
「いいえ」

「私も無いわ。それより、それでどうして、彼が今のセゾンじゃな
いって言い切れるのかしら？」

「はい、それは今から説明しますが、主な理由は二つです。一つ、
彼は決して、“理不尽”な事はしない、という事。二つ目、彼なら
絶対に、犯行前に予告状を出す、という事です」

「ちょ、ちよっと待って下さいよ」

リュウさんのあまりにも探偵らしからぬ文言に、僕と真帆さんは
異を唱える。

「そうよ。盗むことのどこが理不尽じゃないって言うの？ それに、
前の美術館の時だって予告状出してたじゃない」

しかし、彼はもう、自分の説に確信を持っているらしい。慌てず
騒がず、自分の推理を披露する。

「先にも言ったように、彼は闇ルートの絵画などを専門としていま
す。捜査員をかく乱するのに使うのは主に催眠ガスで、必要な物
まで壊すような事は絶対にしません。ところが、今のセゾンはどう
でしょう？ 何でもかんでも、まるで自分が盗みやすそうな、ある
いは目にとまったものを片っ端から盗み、閃光弾や催涙弾まで使用
します。さらに、制御室や入り口としたドアなど、邪魔なものはほ
とんど壊しています。今まで捕まらなかったのが本当、奇跡のよう
なやりくちですよ」

「…… たっちゃん、その言い方だと、今のセゾンはあの事件以外に
も、かなり盗みを働いている事になるわ」

「その通り。此方が、俺が目をつけた、セゾンの犯行と思しき事件
の捜査資料です」

リュウさんは相当、セゾンについて調べていたらしい。次から次
へと、彼の推理を裏付ける証拠が出てくる。

「でも、何でそれがセゾンの犯行だと？」

「似てるんだよ。見てもらえば分かるけど、少なくともここにまとめた事件に関しては、同一人物の犯行だと言って良いと思う」

真帆さんの横から資料をのぞきこむと、確かに、電気系統を先に壊してから、ドアをこじ開けて潜入するというスタイルが、どの事件にも共通している。しかし、盗んでいるものがバラバラ——宝石、絵画、盆栽、売上金……etc——で、場所も複数の県にまたがっているのも、警察の人はなかなかこの事件を結び付けられないだろう。まあ、割と近県で起こっているのも、近々誰かが気付く可能性は否定できないが。

「じゃあ、何故これと今のセゾンが同一人物だって言うの？」

「……実は俺、奴の後姿を見ているんです」

『え！？』

これには、流石の真帆さんでさえ驚いていた。まさか、リュウさんがセゾンを目撃しているなんて、当の本人でさえきつと、気が付いていないだろう。また、その穴の多さも、虎季さんの犯行ではない事の裏付けとなったに違いない。

「黙っていてすみません。でも、確証を見つけるまでは言い出せなくて」

「……まあ、それは良いとして。“髪の長い女”というのが、目撃証言に共通しているわね。たっちゃんが見たのも、そんな人影だったの？」

「ええ。鴉みたいな、真つ黒な奴でしたよ」

「それで……」

ようやく我点がいった。成程、これなら確かに、リュウさんの説もうなずける。あとは証拠固めの方法を考えていくのか、と僕は思った。しかし、リュウさんはここからが大事だ、とばかりに、僕の方を向いて話し始める。

「そして、虎季はこんな事も言っていた。“後は、若い世代に”。これが意味する所が分かるか、潤」

——若い世代、に？ え、それって……。

「も、もしかして……」

「そう。怪盗セゾンは、もしかしたらお前のそばにいるかもしれない」

「そ、そんな……」

考えた事も無かった。僕のすぐ近くに、犯罪者がいるなんて。しかも同じ年で、世間を賑わすような大泥棒がいるなんて。

「あくまでも可能性の段階だが、つぶせるもんならつぶしたいんだ。協力してくれ」

「そうね……。じゃあ、潤君、覚えている限りで良いの。ここ最近休みがち、あるいは遅刻・早退が多い髪の毛の長い子、思いだせる？」
「待った。一応、この事件達の起きた日にちだ。役に立つかどうかは分からんが……」

一覧表を見、つい今しがたまとめた出席簿を思い出す。所々休んでいたり、遅刻していたりする子は何人もいた。だが。

「……一人だけ。この前後、多くは前にですが、毎回休んでいる奴を知っています」

これと完全に一致したように休む奴を、僕は知っている。何故だろう。ついさっきやっていた作業も、この為だったんじゃないかと思えてくるから不思議だ。

世の中に無駄な事なんてない、という事か。

「誰だ？」

「穂村、那央子」

『ホムラ！？』

彼女の名前を出した途端、二人は身を乗り出して驚きを表現した。
「いてててて」

「だ、大丈夫ですか！？」

「ああ、ちょっと吃驚して、大きな声上げちゃったからな。ってか、なんちゅう大胆な……」

「？」

一人事情の分からない僕は、ただ首をかしげるばかり。

「とらちゃんの名字もね、焔 っていうのよ」

すかさず、真帆さんがフォローを入れてくれる。

「そんな、でも……」

「何かひっかかるのか？」

「いえ……」

何故だろう。全ての証拠が、彼女が犯人である事を示しているのに、僕はその事を認めたくなかった。穂村が友達だから、という理由ではなく、もっと別の、何かが……。

「兎に角、その子が怪しいのは間違いないわね」

考え込んでしまった僕を見て、真帆さんが先を促す。そうだ、まだ穂村がセゾンだと決まった訳ではない。僕は僕なりに、推理をしていけばいい話だ。

「しかし、何の因果かな……。まさか潤のクラスメイトに、セゾンがいるかもしれないなんて」

リュウさんも、そこだけは気にかかっているらしい。

「とらちゃんは昔っから、そういうの好きだったからね。因縁というか、因果と言うか。そういうのを大事にする子だったわ」

真帆さんにも、想う所があるようだ。目を細め、遠くを眺めている。すると、ふと思い出したように言った。

「あのビル。そういえば、とらちゃんが初めて、探偵として仕事した所だったわね……」

「そうだったんですか……」

リュウさんも、その事は知らなかったみたいだ。感慨深げに、空を仰いでいる。

「彼にとって、それだけ思い出深い建物だったのね」

「っていうか、本当にその怪我、大丈夫なんですか？」

話は一段落したようなので、聞きそびれていた怪我の具合について尋ねてみる。何故そんな事になったのかは分からないが、それで

も、そのあまりの痛々しさは、黙って見過ごせなかったのだ。

「ああ、このぐらい、大したことはない」

しかし、そんな風に言われても、僕は全く安心できなかった。怪我の経緯に関しては、真帆さんもリュウさんも、全く教えてくれないからである。多分、僕に心配をかけずまいとした故の行為だろう。でも……。

流石に言葉が足りないと感じたのが、リュウさんは少し間を置いてから、独り言のように呟いた。

「……実はな、俺にも、いや俺達にも、どうしてこんな事になっちまったのか、良く分かっていないんだ。俺が、なんかあいつの大事なもんに触れちまったのかもしれないしな」

本人自身、納得がいてないような話しぶりだった。それが、リュウさんがリュウさんらしくない原因なのだろうか……。

「でも、暴力はいけない事だ。それじゃ、何の為に人が言葉を持ったのか分からなくなる。だから、今度見つけ出してちゃんと償わせるよ。“ごめんなさい”ってな」

そう言って、やっと笑顔を見せてくれた。それでこそリュウさんだ、と僕は思った。

「いいか。お前のクラスメイトの中に、必ず犯人はいる。よく見張っててくれ」

翌日になっても、僕はリュウさんの言葉が頭から離れないでいた。おかげで、授業は上の空。何一つ身が入らない状態だった。

そんな訳で、ぼーっと頬づえをつきながら黒板を眺めていると、不意に横から腹をつつかれた。鈴笠の仕業である。彼はシャーペンで、何かを差している。その方向を見れば、確かに、珍しい光景が広がっていた。なんと、あの委員長が寝ていたのである。鈴笠がわざわざ僕に教えたかったのも、分かった気がした。

そのまま彼女の方を見ていると、その延長線上に、空っぽの机が

眼に入る。僕を悩ませている元凶、穂村の物だ。“見張れ”と言われた後に休まれると流石に、タイミングの良さに違和感を覚える。次に会ったら、何故休んだのか聞いてみよう。そうやって、ぼーっと考えをまとめていたら、不意にある疑問がよぎった。

——って、委員長。どこかで……？

何かが気になる。僕は彼女に、ずっと前に会っている気がする。あるいは……。

「ほい、じゃあ、今のところの主人公の気持ちを答えよ。参道」

「え！ あ、はい。えーっと……」

先生の突然の指名により、僕はすっかりその懸念を忘れてしまった。

「参道君、昨日はありがとね」

休み時間。昨日の御礼を言いに、委員長がわざわざ話しかけに来てくれた。

「気にしないでー」

「ってか、さっきの時間寝てたけど、どしたん？」

気になっていたらしく、鈴笠が尋ねる。まあ、委員長が寝ていた、となれば心配するのも無理はないだろう。

「あははー、ちょっと昨日夜更かししちゃってね。だから心配しないで」

「委員長でも夜更かしするんだ……」

「そりゃ、見たいテレビだって、やりたい事だってあるよ？」

そんなたわいもない話をしていた時、机の上の携帯電話が震えた。液晶画面に映った文字は“神城龍貴”。何だか嫌な予感がして、僕は急いで、中身をチェックする。

それは、これから始まる僕とセゾンの、戦いの始まりを告げるものだった。

——セゾンから、予告状が届いた。

篝火草（後書き）

いよいよ、次話から解決編です。

潤とセゾンの一騎打ち……になるのかどうかはともかく、最後までお付き合いいただければ幸いです。

死人花（前書き）

この第10話“死人花”と、次の11話“風信子”は前後編のお話となっております。

潤の推理も、いよいよクライマックス。ついに、セゾンの正体が明らかになります。

皆さんもセゾンが誰なのか、考えながら読んでいただけると幸いです。

死人花

『御機嫌よう、成田探偵事務所の諸君。突然このような物を贈りつける無礼を、まずは詫びたいと思う。』

さて。しばしの間、私が姿を消していた事で、貴殿らは安心していただろうか。それとも、退屈していたのだろうか。いずれにせよ、そんな杞憂は終末を迎える。

半年前、私は華麗なる貴殿らの計略にまんまと踊らされ、憐れな道化師を演じるという失態を犯した。此度はその雪辱を晴らすべく、“天使の嘆き”を再び、頂戴に参上する。かつての私と、夢夢思わないよう。其方も前回同様、十二分に策をめぐらせていただきたいでは、明月の光の下で会いまみえよう。怪盗セゾン』

「これが、今回うちに届いた予告状よ」

メールを受け取った僕はいてもたってもいられず、人生で初めて早退というものをして、事務所に向かった。そこで、真帆さんから予告状を見せてもらったのだが、この語り口、確かにセゾンからのようである。

「似たような文面で、例の美術館にも来ているようです」

おそらく、美術館の関係者に呼ばれて出掛けていたのであろう。リュウさんは帰ってくるなり、そう告げた。

「何故、今回は事務所にも届いたんでしょっか？」

僕は素直に、最初に浮かんだ疑問を二人にぶつけてみる。

「俺達が調べている事を知っていたか、あるいは自分の正体が勘付かれている、と気が付いたか……」

「些か、タイミングが良過ぎる気がしないでもないですが」

「もしかしたら、俺が虎季とやりあった事が関係してるのかもしれない。此方が三人で団結しているように、虎季と今のセゾンが情報交換をしている、というのは充分に考えられる」

「成程……」

——しかし、それでもやはり疑問は残る。まるで、こうなる事を予想していたみたいだ……。

「いずれにせよ、セゾンの尻尾をつかむ絶好のチャンスだわ。気合を入れていきましょう」

真帆さんの目が、いつになく真剣だった。

「でも、今回はどうしようか。流石に、同じ手を使う訳にはいきませんし」

「そうねえ。でもどの道、警備はしないとね」

「それって……」

「いや、どうせ盗まれちゃうなら、って潤君と同じ方向で考えようかとも思っっちゃったけど、私はそういう訳にはいかないわよね」

上に立つ者は、いつだって立場をわきまえねばならない。それは、真帆さんが一番よく知っているはずだ。その彼女が、こういう事を言う、という事は……。

「やっぱり、事前に防ぐのは難しいんでしょうか？」

聞いたところによると、奴は大分手口が荒いようだったから、証拠の一つや二つ、残っていても良さそうなものだが。

「それが、確かに手口は荒いんだが、逃走経路は割り出せなかったんだよねあ」

「何故ですか？」

「侵入・逃走に使われたと思われるのは、玄関・裏口・トイレの窓・二階の窓……、と割り出せないようにあえて、人が通れそうな出入口全部、開けていきやがったんだよ」

「手間のかかる事を……」

証拠を一つも残さないようにするのは難しい。逆に、証拠を大量に残していく事は可能、という事か。木の葉を隠すなら森の中、と言うが、少しやり過ぎな感が否めない。

「では、他のセゾンがやったと思われる犯行については、どうでし

よう？」

「虎季はそこそこ、一流だったからなあ。あいつはまさしく、証拠一つ残さなかったよ」「いや、そっちではなく」

「……ああ、俺が調べてた奴の方か。あれなら、全部玄関から入って、裏口から逃走してたぞ？」

？ 玄関から入る、というリスクを冒すぐらいなら、普通に裏口から出入りすれば良いのに。何というか、やっぱり行動に無駄が多すぎる気がする。

「じゃあ、今回もその方法で来るのかしら？」

「断定はできませんが……。でも、今のシーズンが予告状も出さず、盗みに入っていたのって、おそらくこの為の練習だったのではないのでしょうか？」

「だろうな。だからこそ、あの予告状の文言だろうし」

この後、三人でしばらく話し合っではみたけれど、妙案は浮かばず。結局、別行動をとる事になった。

そこで僕は、リュウさんが集めていた資料を、もう一度見せてもらう事にした。この前は流し読みしてしまったので、もしかしたら何か新しい発見があるのではないか、と考えたのだ。

それによると、奴が犯行を行ったのは、盗んだ物からも察せられるようにほとんどが個人宅だった。中には、僕でも知っているような、有名な資産家のお屋敷もある。僕は、だから大きな騒ぎにならなかったのではないか、だからこそ狙ったのではないか、と思った。リュウさんにこの事を話すと、

「ああ。そこだけは確かに、虎季の手口と似ているとも思ったよ。でも、いずれも隠居した方ばかりで、金持ちとして有名ではあったけれども、別に後ろ暗くはなさそうだったんだよな」

と言っていた。ふむ、じゃあこの線は無いと見て良さそうだ。

参考になったかはともかく、貴重な情報を提供していただいたのは事実なので、お返しに僕も、穂村の写真を見せようとした。だが、

「俺は、その穂村つて子がセゾンだと思う。だから、写真は見ない。余計な先入観は、捜査の邪魔だからな」

そう、きっぱり断られてしまった。目的は他にもあったのだが、推理の邪魔とあれば仕方が無い。その代わり、僕はこう宣言しておいた。

「誰がセゾンなのかは兎も角、僕が奴の正体を暴いてみせますよ」
もっとも、その時は確証なんて、これっぽっちもなかったのだけれど。

あくまでも、僕の中に渦巻いていたのは、何百という可能性で。その中から一つを導き出せたのは他ならぬ彼女の行動だった、というのは何とも皮肉な話である。

*

警察には真帆さんが話をつけ、前回よりは人員を増やして、警備が行われる事となった。それも、セゾンが指定してきた明月、つまり満月の日が、予告状が届いてから一週間後と日があつたおかげなのだけ。

時間を与え、厳重な警備体制を敷かせる。これは、よっぽど自信があるという事か？ それとも、まさかこんな大事になるとは思っていなかったのだろうか。

予告状が届いてからというもの、僕はますますそちらに気がいつてしまつて、先生方には申し訳ないが、学校で椅子に座つて机に向かつている事が、苦痛で仕方がなかった。しかし、僕の本分は学生であり、真帆さんもりユウさんもそこだけには敵しい。だからこうして――

「……参道、お前が作る物はいつもユニークだと思つていたが、今回のテーマは何だ？」

「えーと……“世界”？」

我が担任の授業を受けながらも、心は上の空、という訳である。

「あのなあ。誰が自分で想像した物を描けと言ったよ。美術室にある物なんでもいいから、それを模写しろって話だったろう？」

「あははー。そうでしたねー」

回りを見れば各々、指示に従い——鈴笠は椅子、太谷さんと宝生はお互いを、のように——懸命に筆を動かしていた。いや、穂村だけは、林檎を描いている委員長の近くで、何やら探していたが。でもどうやら、聞いていなかったのは僕だけらしい。

「全く。最近、他の教科でもぼーっとしてるらしいじゃないか」

「すみません……」

——そんな事を言われても、僕には他に大事な事が……。

心の中ではそう反論したものの、実際には、言ってもきつと分かってはもらえないだろうから、黙っておく。それに僕自身、どうしてもそこまでセゾンに肩入れするのか、分からなくなりつつもあった。クラスメイトが疑いをかけられているからか。自分の身近で起こった事件だからか。それとも……。

再び思考の世界に入ろうとすると、不意に、よく通る声が耳に響いた。

「せんせー、この像描きたいんですけどー」

声の主は、僕を悩ませている張本人、穂村である。

彼女は、あの予告状のあった次の日からは元気に登校している。

一応、休んだ理由を聞いてみたが、いつも通り月に一回の自主休業だ、と誤魔化されてしまった。

「おお、動かしてもいいぞー。そこじゃ描きにくいだろー？」

「はい」

よいしょ、と先生の作であろう石像を柵の上から動かす穂村。

「つて、意外と重いなー。誰か手伝ってー」

しょうがないなあ、と鈴笠が彼女に手を貸す。

その瞬間、僕の脳裏に何やら閃くものがあつた。

今までの彼女の言動、行動、考え方。そして、セゾンが起こした事件、残っていた手掛かり、それら全てを照らし合わせる。

生じる矛盾、打開策、そして――。

「そうか。そういう事だったのか……」

全ては、繋がった。

「？ 参道？ どうかしたのか？」

「い、いえ、なんでもありません」

この時、僕はこの謎を解く、という事がどういう意味を持つのか、分かっていなかった。

犯人が誰か、つまりはセゾンの正体を明らかにしただけで、それを裏付ける推理と証拠を揃えただけで、満足してしまったのである。いや、元々僕には動機なんて、理由なんてどうでも良かった。何故なら、罪は罪、犯罪は犯罪だから。それが立証できれば、それで良い。

だからまさか、それに足元をすくわれるなんて。思いもよらなかったのだ。

「そう、ついに、気が付かれちゃったか……」

*

「裏口、配置完了しました」

「玄関、OKよ」

「制御室、問題ありません」

「あとはここ、だけか」

物々しい空気の中、ぼつんと佇む天使の嘆きの前で、俺も憂う。

本当に、これで大丈夫なのか、と。

潤とは結局、別行動をとる事にした。危ないから、と真帆さんは止めたが、仮にも潤は探偵のはしくれ。それに、おそらくセゾンは潤のクラスメイトだ。それならば力量的にも、危害は及ばないだろうと考え、一人で動かせている。

それに……。この前、俺に宣言した時の、あの目。あれは、何か

掴んでいる眼だ。かと言って、俺は自分の説が間違っているとは思わない。ただ、純粹に潤の力を見てみたかった。それほどのものが彼に眠っている事は、確かである。

しかし俺は、それが何から来るのかまでは、考えつかなかった。

「展示室、今のところ異常は見受けられません」

「そうか……」

その時である。ふつ、と突然、明かりが消えた。

「！？ おい、誰か制御室へ連絡を！」

「駄目です、応答しません」

「くそつ、やられたか……」

「ぐあつ」

ばたつ、がたつ、と次々に何かが倒れる音がする。前回の経験を生かし、防毒マスクを全員に着用させた事が、どうやら裏目に出たらしい。敵は、強行突破に打って出たようだ。俺は慌てず騒がず、暗闇に目が慣れるまでじっとしている事にする。大丈夫、もうすぐ見えるように……。ところが。

「！？」

三十秒ぐらい経った後、再び明かりがついた。再び目が慣れるまで、およそ一分。

「やられた……」

ようやく視界を取り戻した時、天使の嘆きはすでに、目の前から姿を消していた。

「あとは、潤だけが頼りか」

*

「怪盗つて、難儀な職業だね」

走り去ろうとする小さな後ろ姿に、僕は声をかける。髪の色と同じ衣を身にまとった、その少女に。

「だって、こうやって屋上から逃走するんだから」

「それが“浪漫”って奴なのよ。ま、君には分からないだろうけどね」

足を止めて、くるりと振り向いた彼女——穂村那央子は、誇らしげに言った。

そう。彼女なら、ここに来ると思っていた。臨海学校にあんなにこだわっていた、穂村なら。風流を愛する、彼女なら。

僕は、彼女が来た合図に、用意していた信号弾を発射させる。

「景気の良い花火だねえ」

援軍が来る。そのぐらいいは分かっているだろうに、彼女は余裕綽々だった。

ほどなくして、リュウさんと真帆さんが現れた。他の方はおそらく、眠らされるか何かで無効化されたようである。

「な、潤。どういう事だ……？」

彼女を見るなり、リュウさんは言う。

「俺が見たのは、この子じゃない」

「えー？」

——やっぱり、か。どうやら、僕の勘は正しかったらしい。

「おかしいと思ったんです。リュウさんは“長い髪の毛、鴉みみたいな奴だった”と言っていた。という事は、黒髪じゃないとおかしいんです。でも、穂村の髪の毛の色は、この通り」

地毛だ、と本人は話していたが、知らない人から見れば染めていると思われるのも当然。そのぐらい、彼女の髪は明るい赤茶色なのである。だから、服の色も朱色っぽい。怪盗らしからぬ派手さではあるが、まあこれも“陽動”という事なのか。

「生徒指導の先生に毎回注意されるぐらいだ。これをリュウさんが見落とすとは思えない。……まあ、本当は先に確認してほしかったのですが、生憎断られてしまったので」

そう、写真を見れば一発で、彼も穂村が犯人じゃない事は分かっただろう。

もっとも、その先まではきくと、僕にしか読めなかったとは思う

のだが。

「ああ、それで……」

「じゃあこの子は一体……？」

「だから、さ。隠れてないで出てきなよ。君もだろ、セゾンは。ねえ、委員長」

——すつつ。

小さな暗闇から、どこからともなく少女が現れた。長い黒髪で、マントのような漆黒のコートに覆われたその姿は、まさしく鴉と呼ぶにふさわしい。

「残念。ばれちゃったか」

舌をぺろっ、と出して笑う姿は、ちつとも悔しがっているようには見えない。その代わり、穂村の方は歯を食いしばっていたけれど。「何故、私達が犯人だと思ったの？」

「そうよ、私一人の犯行かもしれないじゃない」

「いや、それはない」

僕は、はっきりと断言した。確たる証拠を、この胸に抱きながら。「どうして、そう思うんだ？」

「単純な事です。まず、共犯説を裏付ける証拠として、三つ。一つは、あの像」

「このぐらいなら、簡単に持ち運べるわよ？」

委員長が、これもいつの間にかそこにあった、足元の袋を指して言った。

「確かに、それ自体はその名——“天使の嘆き”という荘嚴なイメージに似合わず小さい。せいぜい、五十センチぐらいしかないだろう。しかし、それを入れてあったガラスケースの方は、どうでしょうか？」

『あ！』

「そういえば、あれは上からかぶせるタイプだったな」

その通り。しかも、像は見えやすいよう、台座の上に置かれている。そのため、実際には頭より高く持ち上げなければ、中の像もケ

「スも傷付けないで運ぶのは不可能。それを一人で、というのはなかなか難しい芸当だろう。」

「反論がないようなので、僕は続ける。」

「二つ目。は、リュウさんに裏付けをとらないと厳しいかな」

「何だ？」

「今日のセゾンの手口は？」

「概ね、いつも通りだ。電気を消して、それから警備員達を襲い、もう一度電気をつけて」

「成程。それは、一人じゃ無理だわ。消すだけならまだしも、つけるとなれば」

「あ！ 誰かが制御室にいなきゃ……」

「真帆さんも、今回は別行動をとっていた為、この事は知らなかったはず。流石、安楽椅子探偵の名は伊達ではない。」

「そうなんです。僕もそこがひっかかっていました。何故セゾンは、わざわざ扉を壊してでも、そこに入ったのか、と。そんな手間をかけるぐらいなら、時限式の装置でも仕掛けておけば良い話ですから」

「もっとも、今回は時間稼ぎの意味もあつたんだろうけど。それにしたって、一人でやるには手間がかかりすぎる。計画を立てた奴が二人でやる事を前提に考えたのが、こういう所からも分かる。」

「二人だからこそ、か。それなら、逃走経路を惑わす為だけに全ての入り口を開けていったのにもうなづけるな……。人数を悟られないための工夫でもあつた訳か」

「これは推測にすぎないが、委員長は普通に裏口から出たがったのに、穂村は屋上にこだわったのだろう。あくまでも怪盗としての“スタイル”にこだわる穂村と、仕事の達成という“目的”を重視する委員長。目に見えるようだ。」

「まあ、ここまででは、おそらく真帆さんもリュウさんも勘付いてはいただろう。ただ、決定的な証拠にはならないというだけで。でも、最後の理由だけは、僕にしか、彼女達の友人である僕にしか、分からないような気もした。」

「三つ目は？」

委員長が先を促す。その目はやはり、自分達の正体を当てられて悔しい、というよりは謎を解かれて喜ぶ出題者のように、僕には見えたと。

「手口が矛盾しているんだ。まず、電気を消すという行為から、赤外線及び監視カメラから逃れるための行動だという事が読みとれる。しかし、それをどこで操作しているかなんて、調べなければ分からない事だよね？ それに、全ての出入り口を開けた、という所からも、犯人の用意周到性がうかがえる。だが、現場に来てからはどうか？ 道具の用意はしてあったんだろうけど、何というか、手口がお粗末すぎる」

「それこそ、一人の犯行を裏付けるんじゃないの？」

「ああ。ここで僕は穂村が犯人ではないか、という疑いを持った。準備は完璧なのに、不器用、まさに穂村の人柄を表してる」

「私……そういう風に見られてたのね」

穂村が嘆くが、そこはスルーさせていただく。でもまあ、委員長がくすつと笑った所を見ると、あながち間違ってもいないようだ。

「しかし、ここで注目すべきは“実際に盗みを働いた奴は、リュウさんに姿を見られているのにもかかわらず、逃げおおせた”という事だ」

「それは、計画が完璧だったから……」

「いいや、それは違う。何故なら、どうやって盗んだか、という証拠に関しては何も残っていないんだ」

『あ！』

「ここに、天才的な盗人の存在が浮き彫りになる」

「盗人言っなし……。怪盗と」

「じゃあ、私一人ではない、っていう証拠は？」

穂村の呟きには耳も貸さず、委員長は相変わらず楽しそうに、急ぎ立てる。

「それには苦勞したよ。でもね、委員長。やっと君の弱点を見つけ

たよ」

「弱点？」

「まあ、そこが強みでもあるんだけど。君の犯行は確かに無駄がない。美しいまでに。だが裏を返せば、無駄な事はやらない、とも言える。だから事前の準備を怠るんだよ。その証拠が、それさ」

「？」

「実物を見ていれば、君だったら気がついたんじゃないのかな？」

その像もレプリカだよ」

「！？」

そう、思い返せば、委員長はめったに、自分から動くことはしなかった。臨海学校の時も、文化祭の時も、この前の出席簿も。なまじ能力がありすぎるだけに、そこは億劫になっていたのだろうか。

いずれにせよ、それで全てそつなくこなしてしまうのだから、恐ろしい才能だと思う。

「そんな委員長だ。さっき言ったような下調べは、絶対にしないだろうね」

「適材適所。だから共犯だと思ったのね……」

僕の推理に、真帆さんも納得し始めたのを見て、悪あがきのように穂村が噛みつく。

「でも、遠足の時はここに来るの反対して」

「あれは、少々大胆過ぎるって止めたただけだろうね。穂村、君は下見するのにちょうどいいとか思ったんだろうけど。その証拠に、いつもなら大騒ぎするはずのお前が、一言も喋ってなかったしな」

「そ、そんなの、こじつけじゃない！」

「僕もそう思う。しかし、二人が共犯だと仮定すると、全ては上手く繋がるんだよ。一点の矛盾も無く、ね」

「確かに……。でも、彼女達を共犯とする確たる証拠が無いのもまた、事実だぞ？」

「そこも、どうやらクリア出来そうです。ねえ、どこかで見ているんでしょう？ 少し出てきてくれませんか？」

すると再び、闇の中から人影が現れた。

死人花（後書き）

この話は主に、どうして彼女たちがセゾンなのか、という理由を描いております。

では、犯行の動機は？と言えば、それは次話で明らかとなります。少年と少女の想いが画策する第11話“風信子”。事実上のラストを飾る作品で、またお会いしましょう。

風信子

「な、お前……！」

怪盗というのは誰しも、どこからともなく現れ、消えゆくものなのだろうか。奇しくも委員長がそうしたように、先代のセゾンもまた、闇の中から姿を現した。

「たけ……兄……」

そう、僕が呼んだのは彼。歴史に名を残す大泥棒、虎季さんだつた。

「やあやあ、もう怪我の具合は良いようだね、龍貴。それと、潤君だっけ？ 初めまして。僕が虎季だ。さて、君はどうして、僕がいると分かったのかな？」

「何となく、こんな絶好の機会を、貴方が逃すとは考えられなかったのだ」

因果を大事にし、場を切要にする彼ならきつと、この絶好の機会を逃すはずが無い。僕がセゾンと初めて会ったこの場所で、彼女達の正体を暴く、というシチュエーションを見ていない訳が無い、そう思ったのだ。

まあ、単純に妹達が心配で、毎回見守っているんじゃないか、とも勘ぐった訳だけれども。

「さて、僕を呼んで何をしよう？」

「ちよつと、真ん中に立つてもらっても良いですか？ 貴方の可愛い妹さん達の、間に」

「！？」

「そうか、君はそこまで分かっていたのか……」

僕に言われるがまま、虎季さんは二人の間に入ってくれた。やっぱり。

「成程。確かにこうして見ると似てるわなあ」

外見的特徴としては、色素が一番薄いのは虎季さん、次いで穂村、

——うわー。恥ずかしい……。間違った事を証拠にしようとしているなんて、僕は探偵失格かもしれない。

意気消沈、落ち込む僕を見かねてか、若干フォローするように、彼女達は言う。

「……音のつながりだったら、他にもあったでしょうに」

「良い所に目はつけたのにね……」

『？』

って……語るに落ちた、のか？ いや、思えば最初から、委員長は自分達がセゾンである事を否定しなかった。固執したのは、穂村だけである。

「……認めはするんだね？ 自分達が“怪盗セゾン”だったこと」

「ええ。私達は二人で一人の怪盗」

いっそ、清々しいばかりの笑顔で、彼女はそう言った。穂村の方も諦めたのか、胸を張って委員長の後ろに並ぶ。

何故だろう。黒服を着ている委員長が影である方が、本来ならば自然だろうに。この二人の立ち姿は、そのまんま陰と陽を表しているように、僕には思えた。彼女達が影に生き、闇に潜む怪盗だからなのか。

あまりにも堂々としている様を、僕はそんな事を考えながら眺めていた。すると。

「おい。で、その音のつながりってなんなんだ？」

リュウさんが尋ねる。疑問があれば、すぐに解決しようとする。その癖はとても良いとは思うのだが、もう終わった事に何をそんなにこだわるのかは、僕には理解できなかった。

僕はやきもきした思いとは裏腹に、彼女達は話を進める。

「あら？ 本当に気が付いてなかったの？」

「那央子と時葉、アナグラムじゃない。腹違いの姉妹の、唯一の共通点よ」

NAOKO、KONOH A。確かに……って。

「h足りないじゃん」

「無音のアッシュよ」

「こんな時だけフランス語読み!？」

ちなみに、無音のアッシュ(h)とは、文字通り、フランス語ではhの音を読まないというルールの事である。つまり、NAHOKOと書いても、発音するのはNAOKOの部分だけなのだ。

「まあ、セゾンもフランス語だからね。かけたかったんじゃないかな」

「はあ……」

なんだろう……。怪盗「フランス」というイメージでもあったのだろうか。でも、フランスかぶれの怪盗って、なんか嫌だなあ。

「で、お前達は何故、こんな事をしたんだ？」

リュウさんはまたも、質問を繰り返す。これ以上間延びしても仕方が無い、と思った僕は、口をはさんだ。

「そんな事、別に良いじゃないですか。セゾンが彼女達である事が分かったんだから、さっさと警察を」

「そこよ」

今まで、ずっと微笑みを絶やさなかった委員長が急変して、真剣な顔つきになった。一体、盗みを働く、という事とその理由との間に、何の関係があるというのだろう。

「そついう、人の心を考えないで罪だけを憎む姿勢。初めて見た時から、私達は似ていると思ったわ」

ま、君がそうなっちゃったのも、なーんとなくは知っているんだけど。

彼女はそう、付け加える。僕は、彼女が何を言っているのか、もしくはこれから何を言おうとしているのか、全く分からなかった。

「何を言って」

「穂村……、いえ、那央子は兎も角、私は貴方を試す為だけに、一連の事件を仕組んだの」

『!?!』

「は、僕を試す為？ それと盗みがどう関係あ」

「盗みじゃないわ。私が企んだのは貴方の観察。とくれば、察しの良い貴方なら分かるんじゃないの？」

ことごとく、僕の反論は彼女の声にかき消される。いつもの委員長なら、こんな事はしないのに。まさか、僕が一年間共に生活をしてきた彼女は、別人だったとでも言うのだろうか？

僕はいぶかしみながらも、言葉を選び、慎重に続ける。

「何を言っているか、さっぱりだな……」

大体、セゾンで盗みを直接担当しているのは彼女のはずだ。それを、“僕の観察が目的だった”と聞かされても……。

「まあ、そりゃそうよねえ。でも、奇妙だとは思わなかった？ 貴方が高校に入学してから、友人達の周りで次々と起こる、不運を」

「！？」

確かに、ここに来てからというものの、僕は忙しさを忘れた事は無かった。それだけ、毎日が充実していて、楽しかった。

何故なら、次から次へと、刺激的な事が起こったから――

「ま、まさか……」

「おかしいわよね？ 那央子が地図を無くしたり、伊紀ちゃんが壊れかけたり、鈴笠君の所にチンプラがおしかけたり。他にも、細かい事を言ったら、沢山あったわよね？ 物が無くなる、なんて日常茶飯事だったし。特に鈴笠君なんか、その正体には“誰も辿り着く事は出来なかった”のに、どうしてあの頭の悪そうな連中が、彼の正体突き止める事が出来たのかしら？」

「そ、それは……」

確かに、それは僕も気になっていた事ではある。しかし、深くは考えなかった。何故なら、なんだかんだで、それは解決してしまっただから。どのような形であれ、誰も傷付く事なく、無事終える事が出来たのだから、それで良いと思っていた。

だから何故、文化祭の時、ずっと店番をしていたはずの委員長がその事を知っているのか。僕も鈴笠も、皆に心配かけるから、と誰

にも言わなかったのに。それに、太谷さんの事だって、僕と当事者の二人しか知らないはずだ。

それすなわち、これらの事件に彼女が関わっている事を意味し、僕の頭はそれを理解出来るはずなのだけれども、それでも、認めたくは無かった。

だって、僕が日常だと信じていた生活が、誰かの手によって作られたものだなんて、誰が信じられるというのだろうか。

「まあ、本当に危なくなる前に助け船を出すようにはしてたけど。だって、私が見たかったのは、貴方が私達の仲間としてふさわしいか、だもの。正直、私はセゾンなんてどうでもよかったわ。私の目的の為、ならね」

いつもとは打って変わって、その瞳に黒い光を宿し、そんな恐ろしい事をさもおかしそうに喋る委員長。これが、あの彼女なのだろうか。何故、こんな事が普通に言えるのだろうか。どうして、そんな事が平気で出来るのだろうか。

ここで、今まで珍しく黙っていた穂村が、重い口を開く。何だかそれは怒っているようにも見えた。

「……あたしは、正直面白くなかったけど。でも、このはがいなきや私はセゾンじゃない。“時”の名前を受け継いだ時から、能力に秀でたこのはが次ぐ事は決まっていたも同然。それを、後妻の子どもだからといってあたしに譲ってくれたのは、あたしの為。たけ兄の話聞いて、ずーっと怪盗に憧れてたあたしの夢を、このはは叶えてくれた。だから、今度はあたしがこのはの願いを叶える番」

穂村はそこで、一旦言葉を切った。そして絞り出すように、ごく複雑そうな表情で、言う。

「君が羨ましいよ、参道君。このはが自分から相棒に、と選んだ君が」

「……何を言っているか、分からないよ」

僕はもう一度、同じような台詞を繰り返した。分かりたくない、と言った方が、適切だったかもしれない。僕は何となく、この先を

聞いてはいけないような、そんな気がした。

それこそ、僕自身を揺るがしてしまうような、そんな事が待っている予感がしたのだ。

「そうね、話が飛躍しすぎたかもしれないわ。混乱してしまうのも、無理はないかもしれない。でも、この一言を言うだけで、話は全て繋がると思うのよ。」

“私達と来れば、もう二度と大切な人を失わなくて済む”

『！』

「さーで、ここからはこの子達の話だ。邪魔者は退散致しましょう」
これまでずっと、僕達の話を傍観していた虎季さんが、何かを発する。それは、たった数メートル離れているだけなのに、とても遠くで起こっているような気がした。

足元がぐらついて、意識を保つので精一杯。他の人の事なんて、考えられなかった。それが例え、恩師として慕っている二人の事でも。僕には、それを止められない。

「な、虎季！？」

「だから言ったじゃないか。“あとは若い世代に”って」

こうして、屋上には僕と穂村と委員長、三人だけが取り残された。

真帆さん達が去ってからしばらくして、僕はようやく、落ち着きを取り戻した。

だがそれは、考えるだけの余裕が出来た、というだけで。“冷静である”とか、“平静を保っている”とか、そういう状態とはひどくかけ離れていたのだが。

「調べ、たのか……。なんでそこまで……」

たったの一年前、いや、それにも満たないぐらいの出来事なのに、とても昔の事のように思える。忘れた事はなかった。でも、頭の片隅にしまいこんでいた、あの記憶――

「貴方は知らないかもしれないけれど、私達と貴方が目指しているものは同じなのよ？」

つまり、“世の中を平和に、人々を幸せにしたい”という事”

委員長には珍しく、話が噛み合わない。一步二歩、彼女の方が先を歩いているみたいに、すたすた話を進めてしまう。

だから僕は、追いつくのに必死で、後ろを振り返る事が出来なかった。

ここから逃げ出して、また僕の世界に戻るという選択肢がまだ、この時なら残っていたらうに。

「それとあいつに、僕に何の関係があるんだって言うんだよ」

「私はね、貴方の全てを知りたかったの。そして知った上で、仲間にしようと思った。痛みを知る貴方ならきつと、私達に協力してくれる、そう思ったから」

「痛みを知る……？」

「そう。傷付いた事の無い人に、かけがえのないものを失う苦しみは分かりっこないもの」

「……盗みを働く事が、どうして人々の幸せに繋がる？」

段々、核心に迫っていく感覚を体で感じながら、僕は深みにはまっていく。

「私達は、正しい形に、あるべき姿に、幸せを還元しているだけよ」
「もしそうだとしても、だからって君達のやっている事は、許される事じゃない。犯罪からは、幸せなんて生まれない」

「綺麗事よね。所詮、結果が全てなのよ」

「ふざけるな！」

相入れない価値観を押し付けられて、僕はもう耐えきれなかった。それに、その事を導く為だけに、あいつの事を引き合いに出されたのが、どうしようもなく悔しかったのである。

餌に釣られた魚のようだ。そう思いはしたけれど、僕は続ける。

想いは、止められない。

「幸せは自分の手で掴む物だ。最初に与えられるのは等しく、“命”という一つの幸運。そこからは、自分の手で掴みとっていくんだ。でも、掴んだ物をどうしようと、それはその人の勝手。皆で分かち

合おうが、一人占めしようが、与えようがね。だけどな、だからってそれは盗んでいいもんじゃないんだよ！盗んで、それを誰かに与えて。その誰かが喜ぶと思っっているのか？そんな偽物の幸せ」「偽物……？」

再び、彼女は僕の言葉を遮った。彼女には彼女の信念があり、僕と同じように、それを侮辱されては黙っていられなかったのだろう。普段の彼女からは想像もしえないぐらい、感情をむき出しにして、吠える。

「偽物の何が悪いっていうのよ！そもそも、それが本物かどうかなんて、受け取った人が決める物でしょう？君が偽物だと思うそれに、一体何人の人が救われると思っっているの？！それに、分け与える、ですって？そんな事ある訳ないじゃない。人は所詮、誰だって最後は自分が可愛いのだ。身に余る幸福？そんな物ある訳ないじゃない！いい、人はね、自分が幸せになる為だったら、他人はどうだっていいのよ。だから、君も何も出来なかったんでしょ？彼女が、“塚田花音”が死んだ時、事前に助けられなかったんでしょ？！頭の良い貴方の事だもの、きつと、薄々あの教師の様子がおかしい事ぐらい、勘付いてたんじゃないの？でも、何もしなかった。自分が傷付くのが恐いから。結局、あんたも自分が可愛いのだよ！」

「違う！」

気が付けば、僕の頬を涙が伝っていた。あいつが死んだ時でさえ流せなかった、この滴を。

そう、僕は花音が死んだ時、あまりの事で驚いて卒倒してしまっただけで、一度たりとも泣いた事は無かった。あの時は、あいつの敵をとってやろうと必死だったからだ。それから、日々に忙殺されて、あいつを偲ぶという事は出来なかった気がする。

大好きだったのに。あいつがいなくなって、悲しかったのに。それでも、僕は考えないようにした。目をそらし続けたのである。

“僕は、彼女を救う事が出来たんじゃなかったのか”という、可能

性から。

でも、本当に分からなかった。まさか、丹代先生があんな事で花音を殺してしまうだなんて、誰が考えつくと言うのだろう。

——僕はあいつを見殺しになんかしてない。そして、あいつがいなくなつた事を悲しくないなんて、想っていない。

今ようやく、言葉と共に、振り絞る事が出来た……。

「違うんだ……」

感傷に浸り、くじけそうになる心を必死に奮い立たせて、僕は彼女達と対峙する。

「僕はあいつを、見捨てたりしていない」

逃げたりなんかするもんか。僕はこの手で、僕の信念が正しい事を証明してやる。

「……どうやらお互い、気は合いそうにないわね」

話し合いはこれで終わりだ、とでも言いたげに、彼女はぼそりと呟いた。まあ、話し合いというよりは感情のぶつけ合いだったし、お互い散々、言いたい事はぶちまけただろう。だから、その上で。

「ああ、そうだね。だから」

この時ばかりは、考えていた事は同じだったらしい。僕らの言葉は、宙でシンクロした。

「決別だ」

「決別、ね」

彼女がどういふつもりかは知らないが、僕は元々、誰かと組もうという気はない。協力する事はあっても、僕の想いに完全に呼応してくれる人はいない、と思っっているからだ。

そうさ。話していて分かったよ。僕は、罪を憎む。あいつを、僕の一番大切な人を奪つた事件を、心の底から憎む。推理を楽しむだなんて、我ながらどうかしていた。

だから、それを全部とっぱらって、本当の幸せを白日のもとへさらす。それが、僕の望みだ。誰にも譲つたりなんかしない。彼女の名に、かけても。

「今度会った時は敵同士。……遭わない事を、祈っているわ」

そう言って、彼女達は僕の前から姿を消した。

立ち去る寸前、僕と委員長が喋っていた時はほぼ口を出さなかった穂村が、僕の方をちらつと向いた。心なしかうつすらと、口元に笑みを浮かべて。だがしかし、口は固く閉ざされたまま。彼女は何も発する事無く、闇に溶けていった。

それが、何故かやけに印象的だった。

風信子（後書き）

Seasons 11 話、風信子。いかがでしたでしょうか。

一応、これで本編は終わり。あとは後日談とエピソードになります。展開が急激すぎたかもしれませんが、思い入れのある作品がここまですべて仕上げられて、作者としては感慨深いです。

さて、あと2話です！ 最後に重要なお知らせもありますので、お見逃しなく。
では。

鬱金花

僕だけがぼつんと、闇と同化してしまった屋上にとり残された。

しばらくは、彼女達を見送るように、まるで何かを名残惜しんでいるようにその場から動けなかったが、いつまでもそうしていられる訳ではない。僕は重い足取りで、事務所へ向かう。とてもではないが、家に帰る気にはなれなかった。それに、こんな夜遅くにこんな姿で帰ったら、親に何を言われるか分からない。顔色が悪いであろう事は、容易に想像がついていた。

しかし、本当はどこにも行きたくなかった。正確には、誰とも会いたくはなかった。

僕は、セゾンの正体を見破りたかっただけなのに。犯罪を解き明かしたかった、ただ、それだけなのに。どうして、こんな事になったしまったのだろう。あまりにも沢山の事が、身体の中を渦巻いていた。くるくるぐるぐる、巡っては駆け抜けていく。それらは僕に整理する時間を与えず、混乱する様を嘲笑っているようなようだった。

ガチャリ。

ノックもせずに、傾れ込むように中に入る。

「潤君！ 大丈夫？ ねえ、潤君！」

突然帰ってきたのにもかかわらず、倒れ掛かった僕を、真帆さんは受け止めてくれた。どうやら、まだ心の整理がつかないまま、事務所に辿り着いてしまったようである。

「おい、一体何があったんだ！ セゾンはどうした！？」

「ちよつと、潤君。しっかりして！」

まるで話す事を忘れてしまったように、もしくは喉の奥でつつかえてしまったかのように、言葉が出てこなかった。

靴を脱がされ、部屋の中に入るとすぐさま、二人の手によってソ

ファーに寝かされた。いきなり倒れたのだ。どこか怪我している、もしくは具合が悪いのだと考えても、不思議ではないだろう。しかし、目立った外傷が見当たらないのと、彼らと目も合わせられない僕の様子を見て、察してくれたらしい。最初のうちこそ事情を問われたものの、やがて放っておいてくれた。今は、それがありがたかった。

結局、折角追い詰めた犯人を取り逃がした、だなんて自分の口からは言い出せなかった。

その後、当然のごとく真帆さんから両親に連絡がいき、僕は家へと強制連行された。彼らの前でも生返事しか出来なかった為、翌日は、というかそれからしばらく、学校を休んでいる。

僕が欠席している間に、委員長と穂村は“転校”する事になった、と鈴笠から連絡が来た。お別れ会にはいけない事を告げると、残念そうな声が返ってきた。宝生からも体調を心配してメールが届いていたが、素っ気なく返す。申し訳ないとは思ったが、あんな事があったのだ。彼女達と平気な顔して会う事は、出来ないだろう。それに、向こうだって、僕とそういう形で顔を合わせるのはごめんだろうし。

そういう訳で、しばらく一人になれる時間が出来た。ようやく、きちんと自分の心と相對する時が来たのである。

落ち着いてよくよく考えてみると、彼女達とのやり取りで、何かがこっさり抜け落ちたように、心の中にぽかんと一カ所、穴が開いているような気がした。皆に懸念されるほど抜け殻になっていたのは、その所為だろう。……その穴の名が“後悔”であるという事を、この時の僕はまだ知らない。

だがそれにしては、やけにすっきりした気分であるのもまた、事実である。怪我の功名、という奴なのだろうか。

確かに彼女の言う通り、僕はあいつの事から目を背け続けていた。だから、その点に関してだけは、逃げていたと言われても仕方が無

い。ただ。

向き合って、結論を出したからにはもう、逃げも隠れもしない。せいぜい、堂々と正面切って対峙してやる。もう、立ち留まるのは止めにしよう。

とまあ、何にせよ。

「今度会った時は敵同士。そうだね、今度こそ、君達を捕まえるよ」
決意を新たに、僕は再び歩き出す。

*

「じゃ、新しい学校でも元気でやるんだぞ」

「先生こそ、お元気で」

一年間通った学校を、“転校”という形で離れる手続きを終えた。新しく通う学校や理由をでっちあげるのは大変だったが、これととうとう、この地を立ち退く事が出来る。事務員や他の教員は挨拶の際に何故突然、と不思議がっていたが、担任の戸川先生だけは、何も言わず笑顔で見送ってくれた。なんだかんだ、最後まで謎の多い人である。

もうここには戻れない事が、現実味を帯びたからだろうか。その帰りの道中、那央子が私に聞く。

「ねえ、このは。本当にあれで良かったの？」

——言える訳ないじゃない。

そう、あの時。私がまだ人の心を操る事に慣れていなくて、その練習にと中学校の教師に嫌がらせをしていた頃。もっと言うなら、その教師を追いこみすぎてしまって、無関係の女の子を犠牲にしまったあの不幸な事件で。少女の無残な姿を目の当たりにし、青ざめた少年が倒れる所を、野次馬に紛れて偶然見た。

いや、正確にはその前から、私は彼の存在を知っていた。

あれは私が中学生の時、虎兄と那央子と共に訪れた寺社での事で

あっただろうか。あの頃はよく修行だ、といって美術館やデパートなどに連れ出される事が多かったのである。二人がその宝物庫に忍び込み偵察している間、私は屋根の上に座り、足を外に投げ出してぼーっとしていた。邪魔にならないよう、下見の時はそうしている事が多かったのである。その際、一人で楽しそうに、まるで誰かと会話をするように、喋っている男の子が目に入った。正直、変わった子だなと感じた。だからだろうか。卒倒した彼を見て、ただちに思い至ったのは。一度しか見ていない少年の事を、すぐに思い出せたのは。

何の因果か、私は関係の無い人を巻き込んでしまった。人と人は繋がって生きている、という事を改めて実感させられる。

しかし、その事で私を責める事は、おそらく出来ない。だって、私がしていた事と言えばせいぜい、物の配置を微妙に変えたり、テスト用紙をびしょぬれにしたり、窓を開けっ放しにしたり、神経質な彼の気を逆なでするような事ぐらいだったのだから。別に、私が彼に彼女を殺すように仕向けた、という訳ではないのだ。偶然、彼女がその標的となってしまっただけで。もっとも、丹代が昔から、気に入らない生徒をその手にかけていた、という事を調べていれば、そんな事は防げたのだろうか。……その点でも、私はやはりこの性格に足元をすくわれている。

だからこそ、気の所為と言えば気の所為。気にし過ぎと言えば気にし過ぎなのだろう。

でも、あの光景を思い出す度に、私は考えてしまうのだ。

“彼には前を向いて生きてほしい”

その為なら自分は、悪に染まろう。喜んで、彼の恨みを受け止めよう、と。それがきつと、私に出来る唯一の罪滅ぼしなのだ。いや、その為に罪を重ねるのは、流石にどうかとは思っただが。でも、私に出来るのは盗む事、それだけだ。

……私も、根っからの怪盗だ、という事なのだろう。

さあ、そろそろ終わりにしよう。これは本来、語られるはずの無い話。懺悔とも後悔ともつかない、ただの独り言、なのだから。

だからこんな事、言える訳が無いのだ。

“これで、彼とずっと追いかけてこが出来る”

互いの運命をかけたたちごっこ。それを楽しみにしているなんて、とてもとても。

……言う、訳が無いじゃないか。

*

「うん、いいのよ」

まだ未練たらたらなのかと思いきや、存外晴れ晴れとした顔で言うこのはを見て、私は少し意外に思った。

「ふーん……」

彼女の目的を知っている私としては、何だか腑に落ちない所もある、が。このはの性格まで考慮に入れば、これはある意味、当然の結果なのかもしれない。引きずらないし、顧みる事もしない。過去ではなく、常に前を見据えたその姿勢ならば。もともと、それは両刃の剣でもあるのだが。

そんな事を考えながら、私は通い慣れた道を彼女の後ろについて歩く。なんだかんだ愛着のある場所だったので、もうクラスメイトにも会えなくなるかと思うと一抹の寂しさを覚えたりもするのだが、致し方無いだろう。別れには、慣れている。

それにしても……。彼——参道君は大丈夫だろうか。まあ、私達の前に現れないであろう事は予測していた。学校を休んでいる理由が、それだけだと良いのだが。流石に一週間も来なかったとなると少し心配になってくる。伊紀の話では、彼から返信されたメールの文章も、何だか元氣のない感じだったらしいし。あんなに一気に責めたてられて、意気消沈していたりしないだろうか。最悪、道を踏み外してしまう事も……。

全く。もう少し穏便なやり方は、いくらでもあつたらうに。本当、目的の為には手段を選ばない、というか。遠回りした方が人生は楽しいというのに。まあ、そのまっすぐな所が、このの良い所でもあるのだが。私はそこに惚れ込んだんだし。

「やあ、片は付いたのかい？」

家に戻ると、虎兄がそう、出迎えてくれた。

「ええ。大丈夫よ」

それだけ告げると、このはは奥へ吸い込まれるように入っていた。何だろう、置き忘れた物でもあつたのだろうか。朝のうちに、荷物は全て玄関に運んでおくようにするはずだったのに。

「那央子も、忘れ物はないかい？ もうここには戻って来ないぞ？」

「やだなー。もう子どもじゃないんだよ。問題なし、首尾は上々。完璧よん」

「よし、じゃあ新居に向かう」

すでに大きな家具類は運び終えている。あとは、各自手荷物を持つていけば良いだけだった。

「このはー、何してるのー？ そろそろ行くよー」

「え、ええ。今行くわ」

遠くの方から、早足で階段を下りてくる音がする。大方、二階の窓からこの街を眺めていたりしていたのだろう。頭を左右に振り、気持ち切り替えようとしている様子を見れば、物想いにふけていた事は明らかだった。口では強がっているが、本当は辛い、という事か。

「さーて、じゃあしゅっぱーっ！」

虎兄が無邪気に、先頭をきる。次いで、このは、私。

ここでも、彼女はちらりと振り返り、わずかに目を伏せてから前を向いた。一人でなんでも抱え込むのは、彼女の悪い癖である。そのくせ、誰にも気を使わせないよう、悟られないのが上手いのだ。もつとも、私にはお見通しだった。

——まあ、そういうつもりなら別に良いけどね。でも、このままで終わると思ったら、それは大間違いよ。ううん。私が、このままじや終わらせない。

前に行く少女に悟られないよう、くすりと微笑んで、彼女の謀は暗躍する。

鬱金花（後書き）

この話は、11話の後、潤・時葉・那央子のそれぞれの後日談を描いたものです。

これで、Seasons本編は終了となり、次のエピローグで完結になります。

最後に意味深に残した発言も、一応回収する予定ですので、楽しみに。

では。

エピソード

こうして、一人の探偵の卵と、二人の大怪盗は袂を分かつ。彼らの日常に、終止符は打たれた。

探偵は思った。

——僕はこれからも、罪を憎む。本物の幸せを、この手で掴みとつてやる。

怪盗は思った。

——偽物の幸せでも、私は愛そう。集めて、慈しんであげよう。二人は思った。

——次に会う時は敵同士。それまでせいぜい、腕を磨かなければ。二人はそれぞれの信念を胸に抱き、別々の道へ進もうとしている。お互いを好敵手と認識し、探偵は乗り越えるべき相手と、怪盗は追われ続ける宿命だと考えながら。

それを傍観しながら妨害しようと、一人の少女は企んだ。

少女は誰よりも、もしかしたら本人達よりも、二人の事を知っていた。表も裏も、何故こんな事になったのかのそのきっかけも、大方の事情をわきまえていた。

だから、その上で。全てを理解した上で、少女は想うのである。

——このままじゃ、フェアじゃない。誤解したままさよならなんて、そんなの美しくない。

彼女は交わらないはずの平行線に、一筋の橋を架けようと画策する。——さあ、君はいくつ、私の置いた欠片を拾ってくれるのかしら？ 組み合わせる断片。新たな謎。食い違う証言。心理的矛盾。

全ての証^{しるし}が出そろった時、彼女の目論見は達せられ、真実は解き明かされる。

全てを知った時、彼らは何を選ぶのか？

彼らが再び会いまみえる時、歯車は噛み合い、物語は動き出す。

エピローグ（後書き）

約一年かかってようやく最終話を迎えました、Seasons。いかがでしたでしょうか？

まだまだ未熟なところもありましたが、無事に完結した事を嬉しく思っています。

ここまでお読みいただいた全ての方へ、感謝を。

また、お分かりかと思いますが、続編を書こうと思っております。ただ、下準備に時間がかかりそうなので、しばらくはお待ち下さい。詳細は僕のブログ、および活動報告で。

では、またお会いできる時まで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137k/>

Seasons

2011年9月12日03時19分発行